目　次

はじめに …… 2

調査結果の概要 …… 3

Ⅰ　調査の意図と方法

1　調査わく組み …… 14

2　サンプルの基本的属性 …… 16

Ⅱ　現代高校生の行動特性

1　高校生の行動様式 …… 20

2　高校生の生活の比重 …… 27

3　現代高校生の一般的傾向 …… 30

Ⅲ　高校生の価値観－学校生活を中心に－

1　高校生の行動選択の基準 …… 32

2　高校生の価値観の構造 …… 38

Ⅳ　高校生の規範意識

1　逸脱の許容度 …… 44

2　規範意識の構造 …… 49

3　ユースカルチャーの許容度をめぐって …… 60

Ⅴ　高校生の自我像と将来像

1　高校生の自我像 …… 65

2　高校生の将来像 …… 77

Ⅵ　高校生の行動類型（タイプ）

1　学校適応の規定要因 …… 85

2　ユースカルチャー志向の規定要因 …… 88

3　4つのタイプ …… 90

4　4つのタイプの規定要因 …… 92

5　4つのタイプの特性 …… 92

おわりに …… 102

付　録

●調査票見本 …… 103

●データ篇

単純・クロス集計 …… 114

カテゴリーウエイト表 …… 125

はじめに

『モノグラフ・高校生'80』の第1号は，深谷昌志　奈良教育大学教授を中心に，「高校生の描く未来像―その進路と大学選択」というテーマで実施し，一流進学校の生徒の未来像が必ずしも明るくないことを明らかにした。

第2号にあたる本報告は「生徒文化」をとりあげる。つまり現代の高校生が学校教育を受ける過程で形成した独特な意識や行動様式の特質を明らかにすることを意図している。調査実施にあたって，多くの高校の先生方，生徒諸君の協力を仰いだ。厚くお礼申しあげたい。

また，調査の実施・刊行については福武書店の全面的なご協力を得た。福武書店社長　福武哲彦氏，高校通信教育部　佐藤信氏，中村節子氏はじめ，福武書店の関係者の方々に深くお礼申しあげる。

本調査の実施・報告は，高校教育研究会（代表　深谷昌志）が，行ったものである。調査票の作成から報告まで，深谷教授には終始ご指導いただいた。高校教育研究会のメンバーからは，貴重なご意見を多くいただいた。感謝したい。

本報告は下記のメンバーの共同執筆である。

なお，（　　）内は執筆分担である。

武蔵大学助教授　武内　清（概要，Ⅰ，Ⅱ，Ⅵ）
東京大学大学院　耳塚寛明（Ⅳ）
東京大学大学院　苅谷剛彦（Ⅲ）
東京大学大学院　樋田大二郎（Ⅴ）

本報告が，今後の高校教育のあり方を考えるのに役立てば幸いである。

昭和55年9月

武蔵大学助教授　武内　清

調査結果の概要

青年期という激動の時期にいる高校生が，日々どのような行動をとり，どのような意識をもっているのか，彼らにどのような教育が最もふさわしいのかということに関し，これまで多くの議論や調査が行われてきた。しかし，時代の変化を先取りし多様化する高校生像を充分とらえきれていない。一口に高校生といっても，いろいろなタイプがあるが，そのタイプを分化させている学校内外の要因の関連も充分解明されていない。

本調査は，高校調査の第２号ということもあって，視野を広くとり，現代高校生の特性を，１つの視点から明らかにすることを意図している。その１つの視点とは，現代高校生の生活と意識の特徴を，「生徒文化」(student subculture）としてとらえる見方である。つまり生徒の生活や意識の特徴を，生徒集団に特有なものとしてとらえ，それを規定している学校内外の要因を解明していこうとするものである。

結果の詳細は，第Ⅰ章～第Ⅵ章で報告されているが，その前に結果の概要を報告しておきたい。

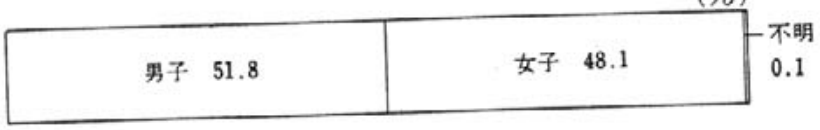
調査メモ

調査時期	昭和55年５月
調査対象	全国の普通科高校生，１年～３年
調査方法	学校通しによる質問紙調査
サンプル構成	公立普通科10校の生徒3458名（１年1109名，２年1210名，３年1136名，学年不明３名，男子1789名，女子1664名，性別不明５名）
調査内容	生活時間，行動様式，生活の比重，学校生活，学校運営，規範意識，自我像，部活動，進路，将来像，高校生の特徴，親の職業・学歴

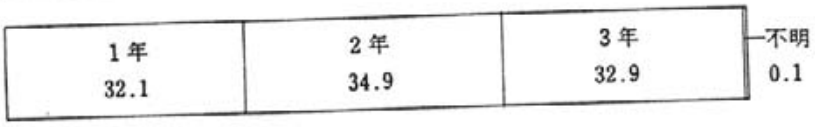
1　調査対象者のプロフィール（第Ⅰ章）

(%)

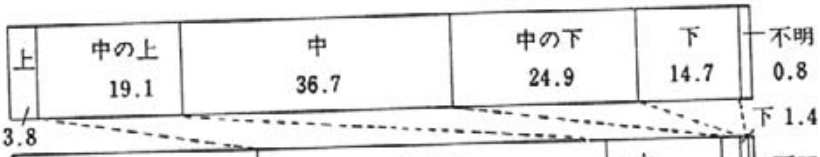
1）性　　別



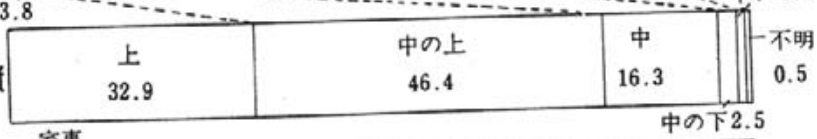
2）学　　年



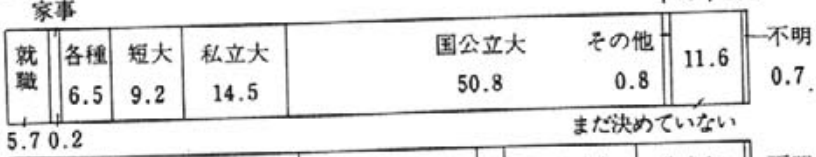
3）現在の成績



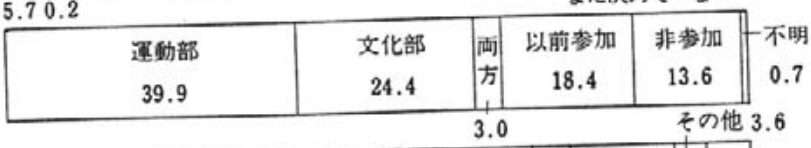
4）中学時代の成績



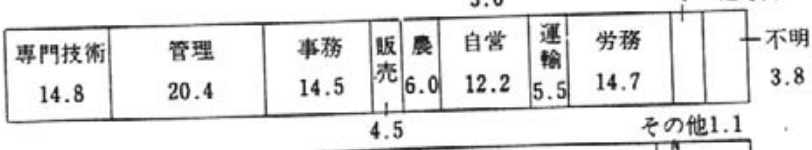
5）進路希望



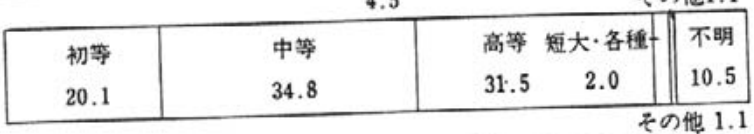
6）部　活　動



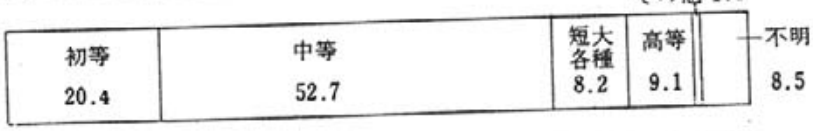
7）父親の職業



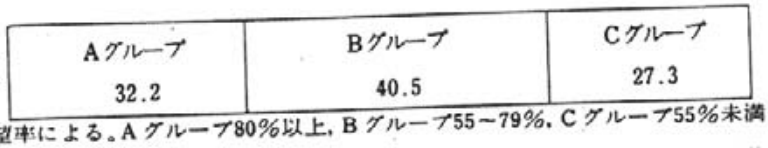
8）父親の学歴



9．母親の学歴



10）学校グループ別



注）4年制大学進学希望率による。Aグループ80%以上，Bグループ55～79%，Cグループ55%未満

注）学歴　初等｛旧制　尋常小学校，高等小学校　新制　中　学　校｝　中等｛旧制　中学校，師範学校，高等女学校，実業学校　新制　高等学校｝　高等｛旧制　高等学校，高等師範学校，高等専門学校　大　学，大学院｝

2　現代高校生の行動特性(第Ⅱ章)

1）現代高校生の生活の比重は「友人関係」「勉強」「クラブ・部活動」の3つにおかれている。（表1）

表1　生活の比重

1	位	友だち（同性）のこと	50.4%
2	位	受験や勉強のこと	45.3%
3	位	クラブ・部活動のこと	32.4%
4	位	音楽のこと	30.6%
5	位	テレビをみること	20.4%
6	位	異性のこと	16.3%
7	位	アルバイトのこと	2.9%

注）生活の「すべて」＋「かなり」のパーセント

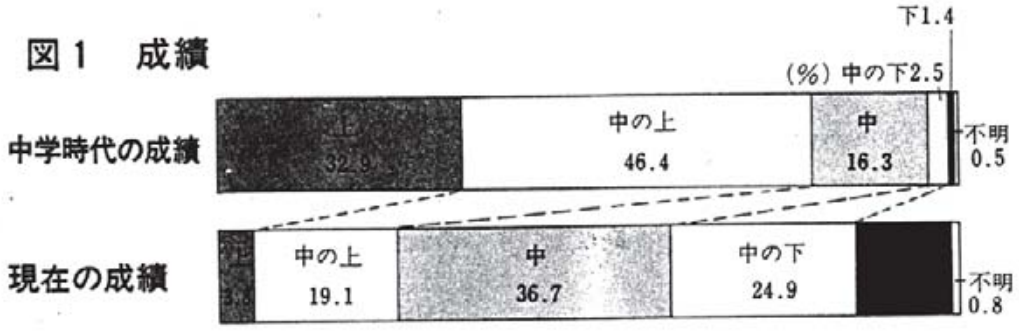
2）部活動に参加するものは3人に2人，それに打ち込むものは3人に1人いて，高校生の課外活動は活発である。(p. 21)

3）女子は男子にくらべ，学校生活に適応し，学校生活を楽しんでいる。(p. 22)

4）1年生はまじめで，2年生はのびのびとし，3年生は受験の重圧を感じている。(p. 23)

5）普通科には中学時代の成績が中の上以上のものが入学しているが（8割），現在の成績は中以下（8割弱）となる(図1)。ほとんどの生徒が成績に対する挫折感をもっている。

図1　成績



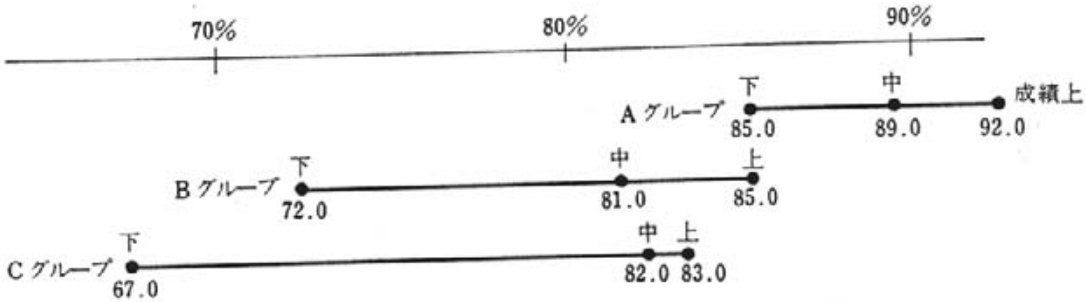
6）生徒の行動や意識には，学校差と成績差がある。進学校の成績のよい生徒ほど勉強中心の学校適応的な行動をとり（図2），非進学校で成績の低い生徒は挫折感，学校への反発心をもち，学校外のユースカルチャーに自己のアイデンティティーを求めるようになる。

注)ユースカルチャー（youth culture）

青年期に特有の価値観や行動様式。遊び・異性・音楽・ファッションなどを中心にした青年独自の文化。時として，おとな文化への反抗的性格をおびる。

図２　学校生活の楽しさ（学校グループと成績別）

注）学校生活が楽しいと感じることが,「よくある」＋「ときどきある」のパーセント



7）現代の青年の特性として「偏差値人間」「人間関係の希薄化」「待ちのパーソナリティー」「権威への従順性」「熱中世代」「屈折した心理」が考えられる。

3　高校生の価値観（第Ⅲ章）

1）高校生の日常生活はなにげない行動選択の積み重ねである。その行動選択の背後には本人も意識しない価値基準がある。その価値基準をとらえる方法としてＰＳ法（状況設定型の質問）がある。

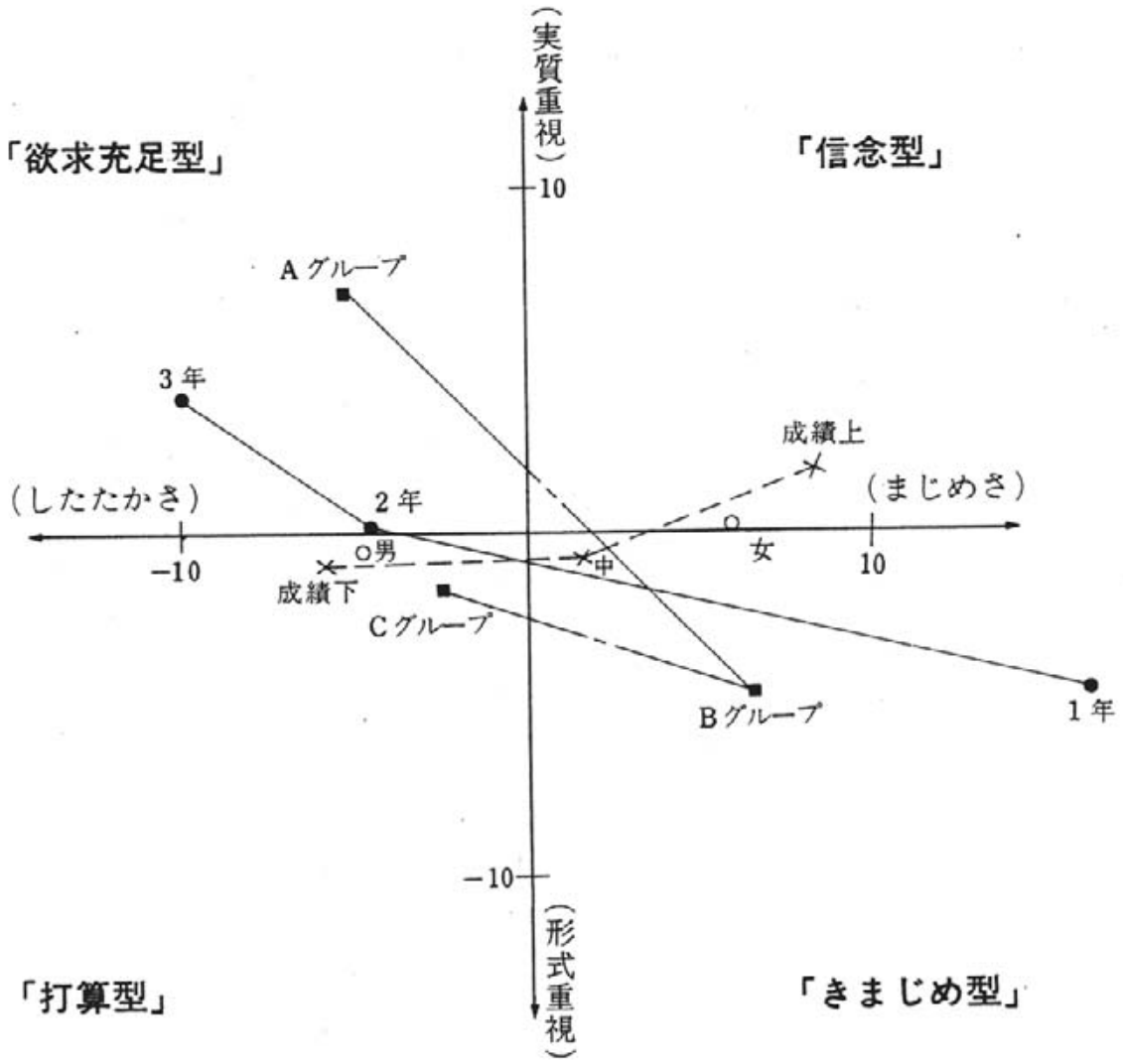
2）高校生は，第１に《まじめ》か《したたか》か，第２に《実質重視》か《形式重視》かという価値基準をもっている。

3）２つの価値基準によって,「信念型」（まじめ・実質重視),「きまじめ型」（まじめ・形式重視),「欲求充足型」（したたか・実質重視）「打算型」（したたか・形式重視）という高校生の４つの価値タイプが見出される。

4）その割合は，信念型24.9%，きまじめ型24.6%，欲求充足型25.8%，打算型24.7%である。

5）「信念型」は勉強にクラブに活躍する積極型で，女子，１年生，成績上位者に多い。「きまじめ型」はおとなしく消極的で，女子，１年生，規則のきびしいＢグループの学校に多い。「欲求充足型」は学校外に楽しみを求め，男子，２・３年，成績下位者，Ｃグループの学校に多い。学校に対する不満や反発は強いが，自分に損なことはしない「打算型」は，男子，２・３年，Ａグループの学校，成績下位者に多い。（図３）

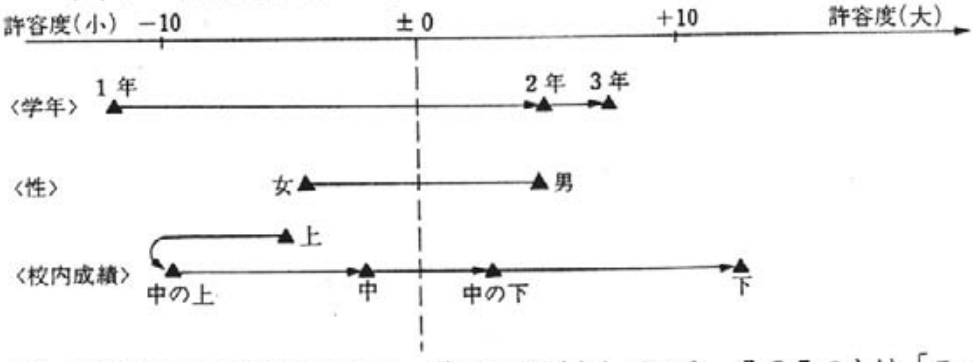
図3　生徒の価値タイプ


（実質重視）
「欲求充足型」
「信念型」
10
Aグループ
3年
成績上
（したたかさ）
2年
（まじめさ）
−10
男
女
10
成績下
中
Cグループ
Bグループ
1年
−10
（形式重視）
「打算型」
「きまじめ型」

4　高校生の規範意識（第Ⅳ章）

1）高校生には多くの禁じられている行為がある。禁止事項をよく守り逸脱行動に対して許容度が低いのは1年生，女子，成績中以上，規則のきびしい学校の生徒である。逸脱行動に対し許容度が高いのは，2・3年生，私立大志望，成績中の下以下，規則のゆるやかな学校の生徒である。（図4）

図4　逸脱行動に対する許容度



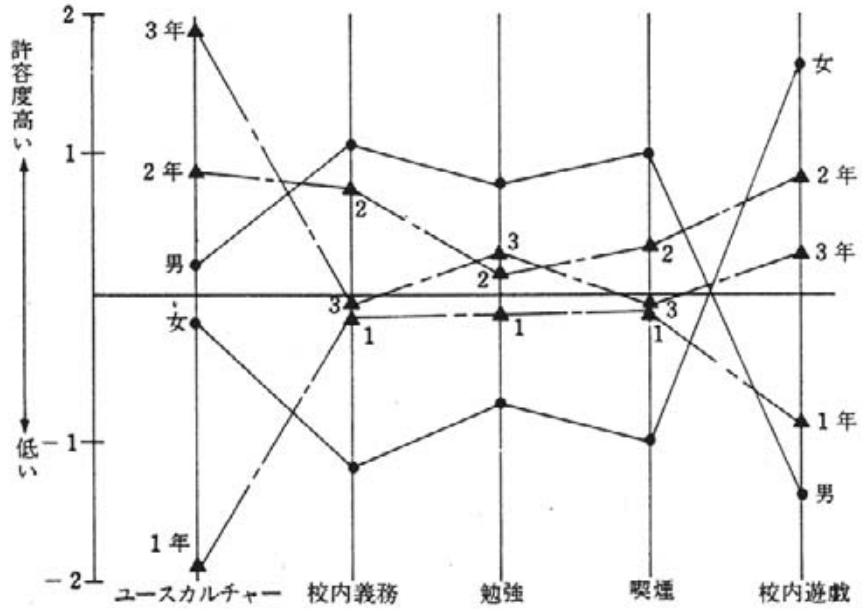
2）生徒は5つの領域に分けて，善悪の判断をしている。その5つとは「ユースカルチャー」「校内義務」「勉強」「喫煙（伝統的非行）」「校内遊戯」である。

注）「校内義務」— 委員の仕事・掃除当番など。

「校内遊戯」— トランプ・マンガなど。

3）男子は「校内遊戯」を除いて，逸脱行動に対し許容度が高く，女子はその逆である。1年生はすべての逸脱行動に対し許容度が低くまじめであり，3年生になるとその逆となる（図5）。学校の規則のゆるやかなAグループの学校は逸脱行動に対する許容度が高く，規則のきびしいBグループの学校で逸脱に対する許容度が低くなる。

図5　逸脱行動の領域別許容度



4）規範意識からみると生徒には2つのタイプがある。学校適応，勉強家，まじめ，誠実，従順という「逸脱視群」と，学校不適応，打算的な授業への関与，ふまじめで，ずるく，反抗的という「許容群」である。

5　高校生の自我像と将来像（第Ⅴ章）

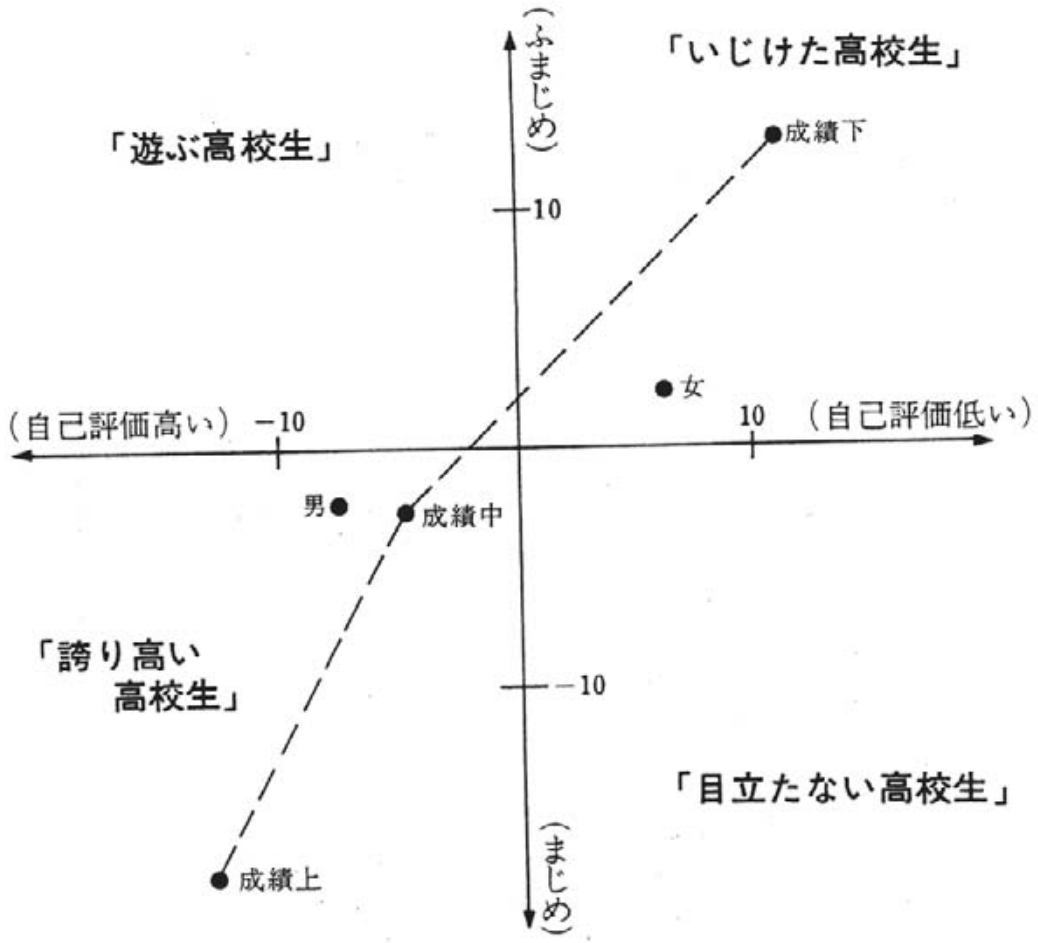
1）高校生の自我像は，①先生から「遊びが好きで友だちづきあいがよいと思われている」と考えている。②先生から多様な自分が評価されたい。③友だちから,「友だちづきあいがよくユーモアがあると思われたい」である。

2）高校生の自我像を仕分ける基準として，《自己評価が高い―低い》と《まじめ―ふまじめ》がある。

3）2つの基準から「いじけた高校生」（自己評価低い・ふまじめ），「遊ぶ高校生」（自己評価高い・ふまじめ），「誇り高い高校生」（自己評価高い・まじめ）「目立たない高校生」（自己評価低い・まじめ）という4つの自我像のタイプが描き出せる。

4）成績の高い生徒ほど，自己評価が高くまじめで「誇り高い高校生」となり，成績の低い生徒ほど，自己評価が低くふまじめで「いじけた高校生」になる。（図6）

図6　高校生の自我像

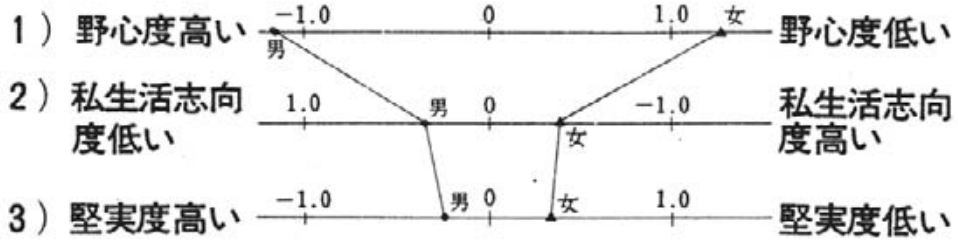


5）高校生は将来の可能性として，①才能を必要とする仕事は努力しても無理，②私生活を大切に生きることは可能，③地方公務員になるより社会のためにつくす人になることの方がむずかしいと考えている。

6）高校生の将来像を仕分ける基準として，①野心度，②私生活志向度，③堅実度という3つがある。

7）相対的に男子は野心度と堅実度が高く，私生活志向度が低い。女子は私生活志向度が高く，野心度と堅実度が低い。（図7）

図7　高校生の将来像



8）成績下位者は野心度と堅実度が低く，私生活志向度だけが高くなる。自分の能力の限界を知るようになると，ピラミッドを登ることを断念し，オアシスに憩うことを夢みる。

6　高校生の行動類型（第Ⅵ章）

1）現代の高校生には，「反抗型」(delinquescent)，「エンジョイ型」(fun)，「勉強型」(academic)，「孤立型」(isolative）の4つのタイプがある。（図8）

図8　生徒の行動類型

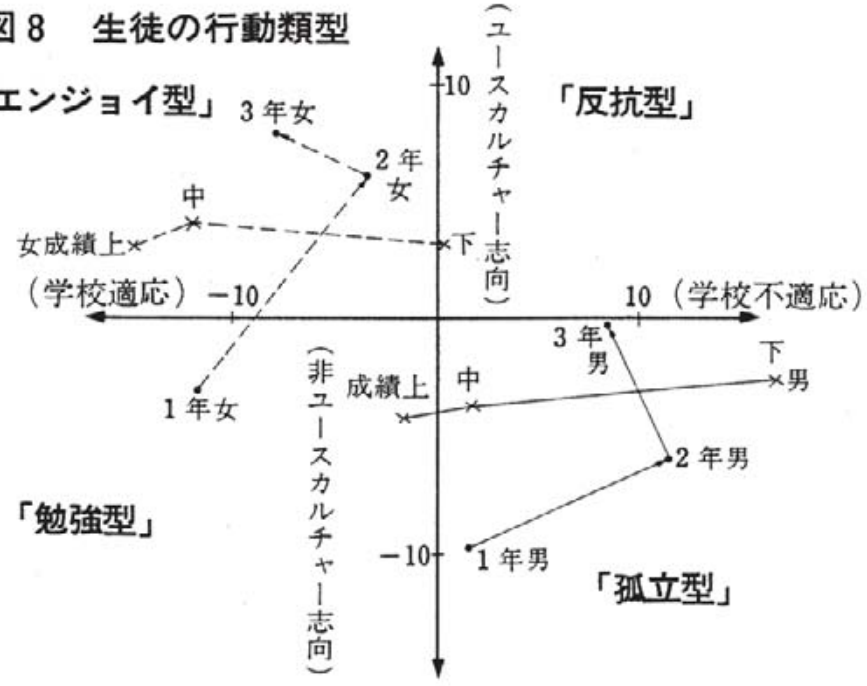
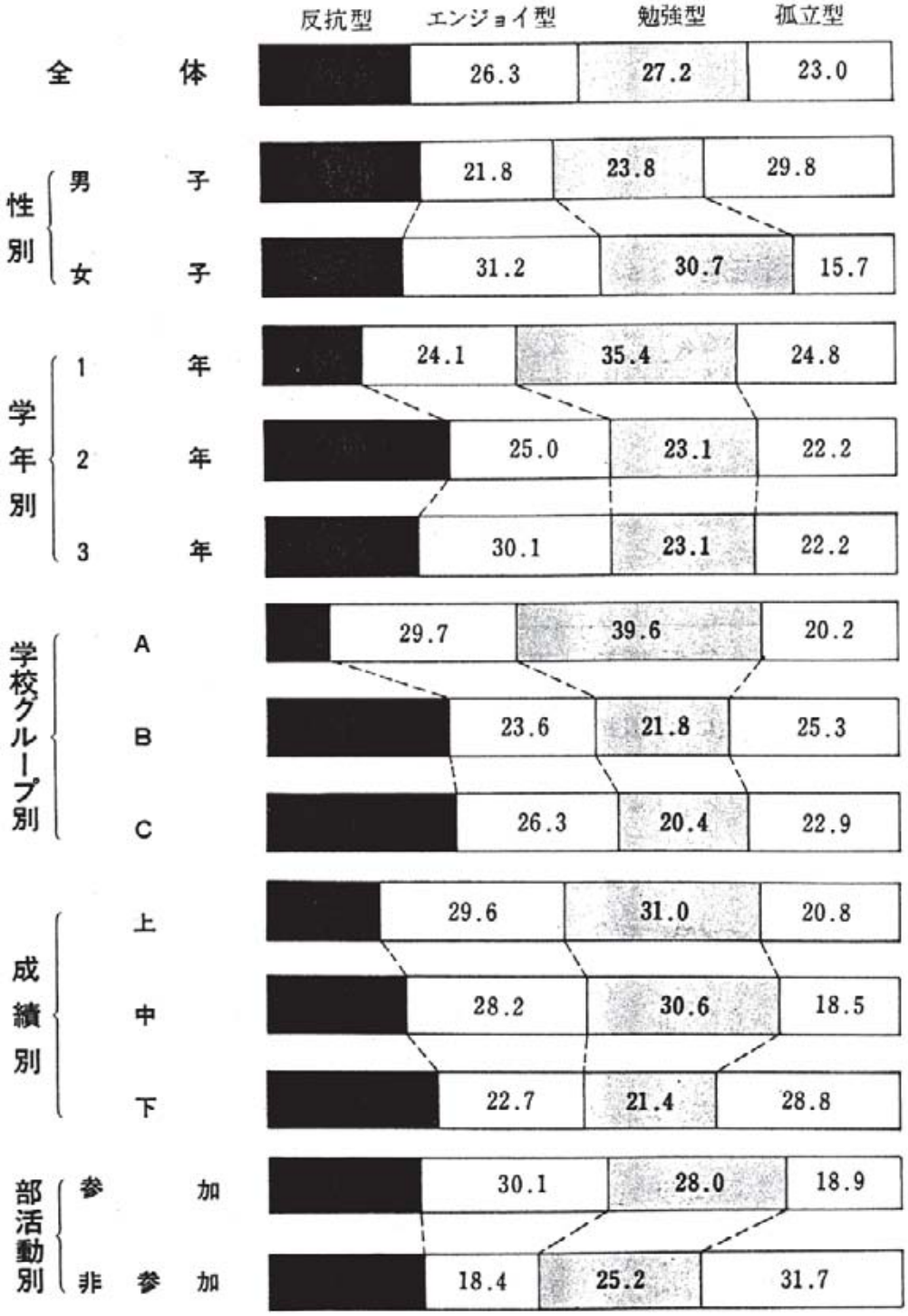


図9　生徒の行動類型（属性別）



2）「反抗型」（23.5%）は，おとなに反発し，学校生活に不適応で，その代償をユースカルチャーに求める。2年，B・Cグループの学校，成績下位者に多い。（図9）

3）「エンジョイ型」（26.3%）は，勉強に偏らないで，部活動，友人関係と学校生活を楽しんでいる。女子，3年，Aグループの学校，成績中以上の生徒に多い。（図9）

4）「勉強型」（27.2%）は，望ましい生徒としての役割を内面化して勉強中心の生活を送る。女子，1年，Aグループの学校，成績中以上の生徒に多い。（図9）

5）「孤立型」（23.0%）は，学校，クラス，友人，異性のすべてに対し，不適応で，1人で閉じこもりがち。男子，1年，Bグループの学校，成績下位者に多い。（図9）

6）生徒の行動類型は，生徒の価値観，規範意識，自我像，将来像とも密接な関係をもち，いくつかの高校生群像が形づくられている。

7）生徒の特性に応じた，多様な教育手段が工夫されねばならない。

I　調査の意図と方法

1　調査わく組み

戦後日本における高校進学率の上昇はめざましい。昭和25年は42.5%であったが，昭和35年に59.8%，昭和45年に82.9%，そして昭和54年に94.0%と，過去30年に約50%の上昇をみている。進学率の上昇にともなって入学してくる生徒の能力，適性，興味関心，動機もきわめて多様化している。高校教育はエリート型からマス型を経て，ユニバーサル型に移行しているのである。しかし高校側はこの入学してくる生徒の多様化に充分対応しきれてはいない。

現在，高校は全国に約5,000校あるが，それぞれの高校は，校風，学校経営方針，教師，生徒の特性の違いによって，さまざまな特色をもっている。高校生という時期は，きわめて可塑性のある時期である。どのような校風や教育方針の学校に通うか，あるいはどのような教師や生徒がいる学校で過ごすかによって，生徒の意識や行動様式は違ってくる。

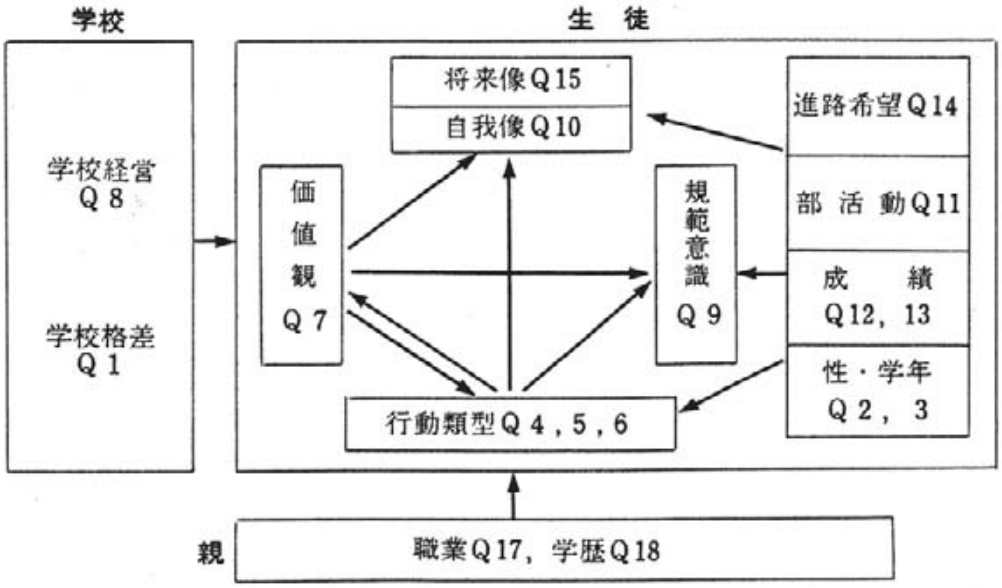
本調査では，「生徒文化」（student subculture）という視点から，生徒の意識や行動様式を明らかにする。つまり現代の高校生が学校教育を受ける過程で形成した，生徒に独特な意識や行動様式の特質を明らかにすることを意図している。おとなからの役割期待とは必ずしも一致しない生徒に独特な意識や行動様式は，学校という社会から孤立した文化孤島において，生徒同士の相互作用を通じて形成

される。この生徒文化の形成には，生徒同士の相互作用のほかに，学校の社会的背景，学校組織，学校運営，教師―生徒関係，ユースカルチャーといった学校内外の要因も働いている。現代の高校生が学校外の要因から影響を受ける場合も少なくないが，生活の量・質とともに，学校の比重が高まっていることも確かである。1日の約1／4を学校で過ごし，将来も学校での成績によって左右される。生徒の意識や行動様式の形成を，学校との関連で見ていくのが，生徒文化的視点といってよいであろう。このような視点が有効なのは，青年期における学校の比重が高まっているからである。

本調査のわく組みと調査項目を図I―1に示した。調査内容は，大きく，生徒自身のこと，学校のこと，親のことの3つに分かれる。学校に関しては，学校格差と学校経営が生徒にどういう影響を及ぼすかをみる。親に関しては，親の職業と学歴の影響をみる。

生徒自身のことは，第1に，性，学年，成績，部活動，進路希望といった属性的要因が，どのような意識や行動の違いをもたらすかを明らかにする。第2に，生徒文化（student subculture）の各側面（行動，価値観，規範意識，自我像，将来像）が，どのような構造になっているかを明らかにする。第3に，生徒の行動を根底から規定しているものとして，生徒の行動類型（タイプ）を出し，生徒の意識や行動の各側面との関連をみる。以上のように，生徒の意識と行動の実態を，学校に焦点をあてつつ構造的に把握し，今後の高校教育のあり方を考えるのが，本調査のねらいである。

図I－1　分析図式



2　サンプルの基本的属性

1）調査対象校の特質

今回の調査対象は全国の普通科高校を代表するようなサンプルを選んだ。その際に，地域比率，進学率，男女比，学年比を考慮した。まず，地域別の生徒数比率により，北海道より1校，東北より1校，関東より2校，中部より1校，近畿より2校，中国・四国より1校，九州より2校を割り当てた。次にいわゆる「学校格差」を考慮して，昭和54年度国立大学合格者数により，①（90人以上）2校，②（30人以上）5校，③（5人以上）2校，④（4人以下）1校という配分を考えた。また男女比，学年比も偏らないように，各学校でほぼ同数のサンプルをとるように依頼した。以上のような配慮をして全国で公立普通科高校10校に調査を依頼した。今回のサンプルはランダムサンプルではないが，日本の公立普通科の高校生のサンプルを代表していると考えてよい。これは全高校生の2／3にあたる。残り1／3の私立，職業科，定時制に通う高校生については今回調査の考察外においた。ただし，いわゆる超一流進学校は今回のサンプルに含まれていない。超一流進学校の生徒の意識については『モノグラフ・高校生'80』vol.1を参照されたい。

表Ⅰ—1は，今回の調査対象校の特質を示したものである。

学校グループは国立大入学者数，大学進学希望率，中学時代の成績等を考慮して，対象校を学校格差の面からＡＢＣの3つに分けた。学校格差が学校経営や生徒文化に与える影響も大きいので，この面の考察も無視できない。Ａグループの高校では，4年制大学進学希望者が8割以上いて，国立大学にも毎年100名近く入る進学校である。中学時代の成績は中の上以上がほとんどである。Ｂグループの高校では，4年制大学進学希望5～7割，国立大学への進学も毎年50人前後の準進学校である。中学時代の成績の平均は中の上である。Ｃグループの高校は，中学時代の成績の平均は中以上で，4年制大学進学希望5割以下で，国立大学進学者数10名前後の準進学校である。

学校経営の特色を，学校別に生徒の評価（Ｑ8）からみたものをみてみると，同じグループ内の学校でも，学校によって学校経営の重点の置きどころが違うことがわかる。

A_1 は，受験指導のみ重視の進学校である。A_2 は，受験指導も重視するが，部活動，学校行事にも力を入れている。

A_3 は，受験は重視せず，部活動，学校行事を重視して，勉強は生徒の自主性に任せている。B_1，B_2 は，進路指導と規則重視の学校である。B_3 は，部活動，学校行事に重点を置いている学校である。B_4 は規則重視と学校行事重視の学校である。Ｃグループの学校は，部活動，学校行事で，きめ細かく指導していく学校（C_1，C_2）と，規則と就職指導重視の学校（C_3）がある。

表Ⅰ－1　調査対象校の特質

学校グループ	学校名	所在地	学校創立年	4年制大学進学希望率	就職希望率	中学時代の成績 上中下 1↑3↓5	学校運営の重点(力を入れていると思う) 受験指導	就職指導	クラブ・部活動	文化祭 体育祭	規則	部活動参加率
A	A_1	大阪	大正	87.4	1.0	1.21	++	−−	−−	−−	−−	52.0
	A_2	東京	昭和戦後	88.3	0.6	1.36	+	−−	++	++	−−	87.9
	A_3	東京	大正	83.2	0.0	1.54	−	−−	+	++	−−	68.8
B	B_1	愛知	昭和戦後	71.0	2.3	1.83	++	−−	−−	−−	++	67.6
	B_2	岡山	明治	57.4	4.6	2.22	++	++	−−	−−	++	45.2
	B_3	福岡	大正	66.4	5.3	1.90	−	+	+	+	+	64.0
	B_4	京都	昭和戦前	56.1	7.2	2.09	−−	−	−	+	++	74.7
C	C_1	福岡	大正	53.7	10.7	2.32	−	+	++	+	+	80.4
	C_2	宮城	昭和戦前	34.0	22.8	2.42	++	++	++	+	++	93.1
	C_3	北海道	昭和戦前	41.3	11.7	2.58	−−	++	−	−	++	53.4
全体平均				65.2	5.9	1.92	62.4	21.4	44.0	45.6	45.8	67.2

注）平均より10%以上重視＋＋，10%未満重視＋，10%未満軽視－，10%以上軽視－－

以上のような各学校の学校運営の特色も，生徒の意識や行動に少なからず影響を与えていることも注目したい。

2）調査対象者の特質

今回調査対象になった生徒の基本的属性は以下の通りである。

人，(　)内は%

(1) 学　年　別

高1	高2	高3	不明
1,109	1,210	1,136	3
(32.1)	(34.9)	(32.9)	(0.1)

人，(　)内は%

(2) 性　　別

男子	女子	不明
1,789	1,664	5
(51.8)	(48.1)	(0.1)

(3) 対象校，性，学年別

(人)

	全体	男子	女子	不明	1年	2年	3年	不明
A_1	406	210	196	0	136	139	128	3
A_2	333	166	165	2	90	131	112	0
A_3	374	185	189	0	129	123	122	0
B_1	352	212	140	0	90	132	130	0
B_2	323	159	164	0	112	114	97	0
B_3	375	203	172	0	133	129	113	0
B_4	348	176	170	2	119	120	109	0
C_1	337	179	157	1	87	132	118	0
C_2	215	97	118	0	81	57	77	0
C_3	395	202	193	0	132	133	130	0

人，(　)内は%

(4) 現在の成績

上	中の上	中	中の下	下	不明
131	659	1,271	862	509	26
(3.8)	(19.1)	(36.7)	(24.9)	(14.7)	(0.8)

人，(　) 内は%

(5) 中学時代の成績

上	中の上	中	中の下	下	不明
1,138	1,607	562	88	47	16
(32.9)	(46.4)	(16.3)	(2.5)	(1.4)	(0.5)

(6) 部活動

人,(　)内は%

運動部	文化部	両方	以前参加	非参加	不明
1,377	845	105	636	470	25
(39.9)	(24.4)	(3.0)	(18.4)	(13.6)	(0.7)

(7) 進路希望

人,(　)内は%

就職	家事家業	各種専修	短大	私立大	国公立大	その他
198	7	226	319	503	1,753	27
(5.7)	(0.2)	(6.5)	(9.2)	(14.5)	(50.8)	(0.8)

まだ決めていない	不明
402	23
(11.6)	(0.7)

(8) 父親の職業

人,(　)内は%

専門技術	管理	事務	販売	農林漁業	自営
513	703	502	157	207	421
(14.8)	(20.4)	(14.5)	(4.5)	(6.0)	(12.2)

運輸	労務職人	サービス	その他	不明
190	508	60	64	133
(5.5)	(14.7)	(1.7)	(1.9)	(3.8)

(9) 父親の学歴

人,(　)内は%

初等	中等	短大各種	高等	その他	父いない	不明
696	1,205	68	1,088	39	68	294
(20.1)	(34.8)	(2.0)	(31.5)	(1.1)	(2.0)	(8.5)

(10) 母親の学歴

人,(　)内は%

初等	中等	短大各種	高等	その他	母いない	不明
707	1,823	282	313	24	15	294
(20.4)	(52.7)	(8.2)	(9.1)	(0.7)	(0.4)	(8.5)

II　現代高校生の行動特性

高校生の基本的な行動や意識の実態をまず，みておきたい。「生徒の行動様式」（Ｑ５），「生活の比重」（Ｑ６），「高校生の一般的傾向」（Ｑ16）についての回答を分析する。

同じ高校生でも，生徒の属性によってその基本的行動は大きく違ってくる。高校生の行動や意識を規定しているものとして（１）性，（２）学年，（３）成績，（４）部活動，（５）進路希望，（６）学校特性，（７）親の学歴・職業といった要因が考えられる。

1　高校生の行動様式

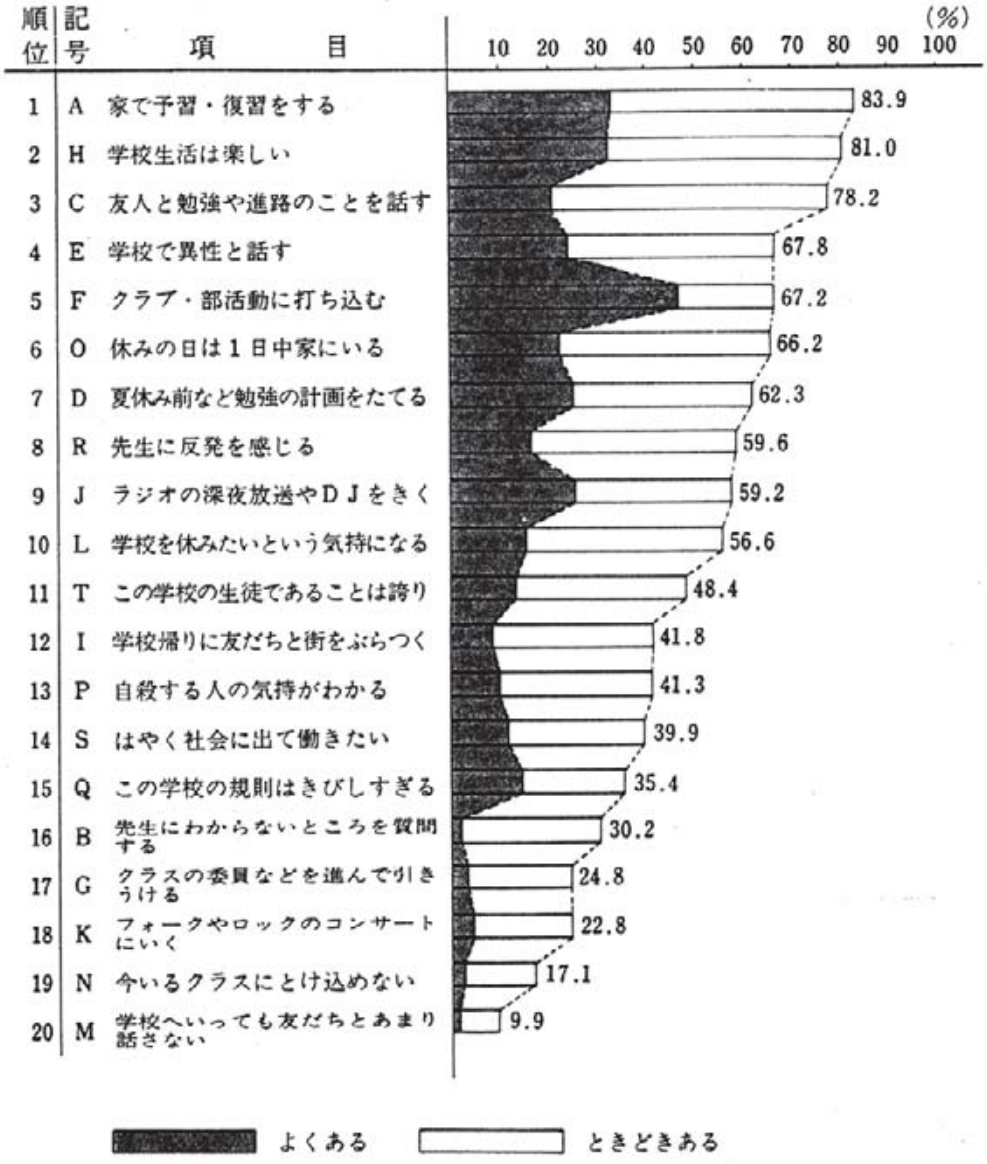
1）友人関係志向

高校生の基本的な行動や意識に関する20項目について，したり，感じたりすることがどのくらいあるかを，４段階（よくある，ときどきある，ほとんどない，全然ない）で尋ねた。その内容は，勉強（Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄ），友人・異性・ユースカルチャー（Ｅ，Ｆ，Ｉ，Ｊ，Ｋ），学校不適応（Ｇ，Ｌ，Ｍ，Ｎ，Ｑ，Ｒ，Ｓ），孤独（Ｏ，Ｐ），学校生活満足度（Ｈ，Ｔ）である。

図II－１は，「よくある」と「ときどきある」の回答の多い順に示したものである。

1位～5位をみると（2/3以上），友人関係のこと，学校生活の楽しさなど，高校生活のインフォーマルな側面があがっている。次に6位～10位（1／2～2／3）をみると高校生のおとなへの反発や孤独感，学校への不適応感を半数以上がもっていることがわかる。11位～15位（1／3～1／2）は学校に対する誇りや，逆に規則に対する反発，自殺への共感，学校帰りの寄り道，社会に早く出たいという気持などがあがっている。16位～20位（1／4以下）と少ないのは，友人への不適応や公共の精神である。

図II－1　生徒の行動様式



2）学校適応的な女子

各行動や意識の性差も大きい。男子より女子の方が20項目中14項目で，行動や意識の頻度が高くなっている。とりわけ勉強や学校生活に対する適応度に関する項目で，女子の回答が多い。「学校生活は楽しい」（女子86.5%，男子75.9%）「この学校の生徒であることは誇りである」（女子54.7%，男子42.4%），「友人と勉強や進路のことを話す」（女子85.9%，男子70.9%），「学校で異性と話す」（女子75.0%，男子61.1%）という差がある。また，「自殺する気持がわかる」（女子49.4%，男子33.6%）も女子に多い。

男子が女子より多いのは，20項目中６項目で，学校生活や友人関係への不適応を示す項目が多い。「この学校の規則はきびしすぎる」（男子37.9%，女子32.7%），「ラジオの深夜放送やＤＪをきく」（男子61.8%，女子56.5%），「学校へいっても友だちと話さない」（男子11.8%，女子7.8%）である。

一般に男子より女子の方がおかれた状況に適応的で，生活を楽しんでいるといえよう。

3）のびのび２年生

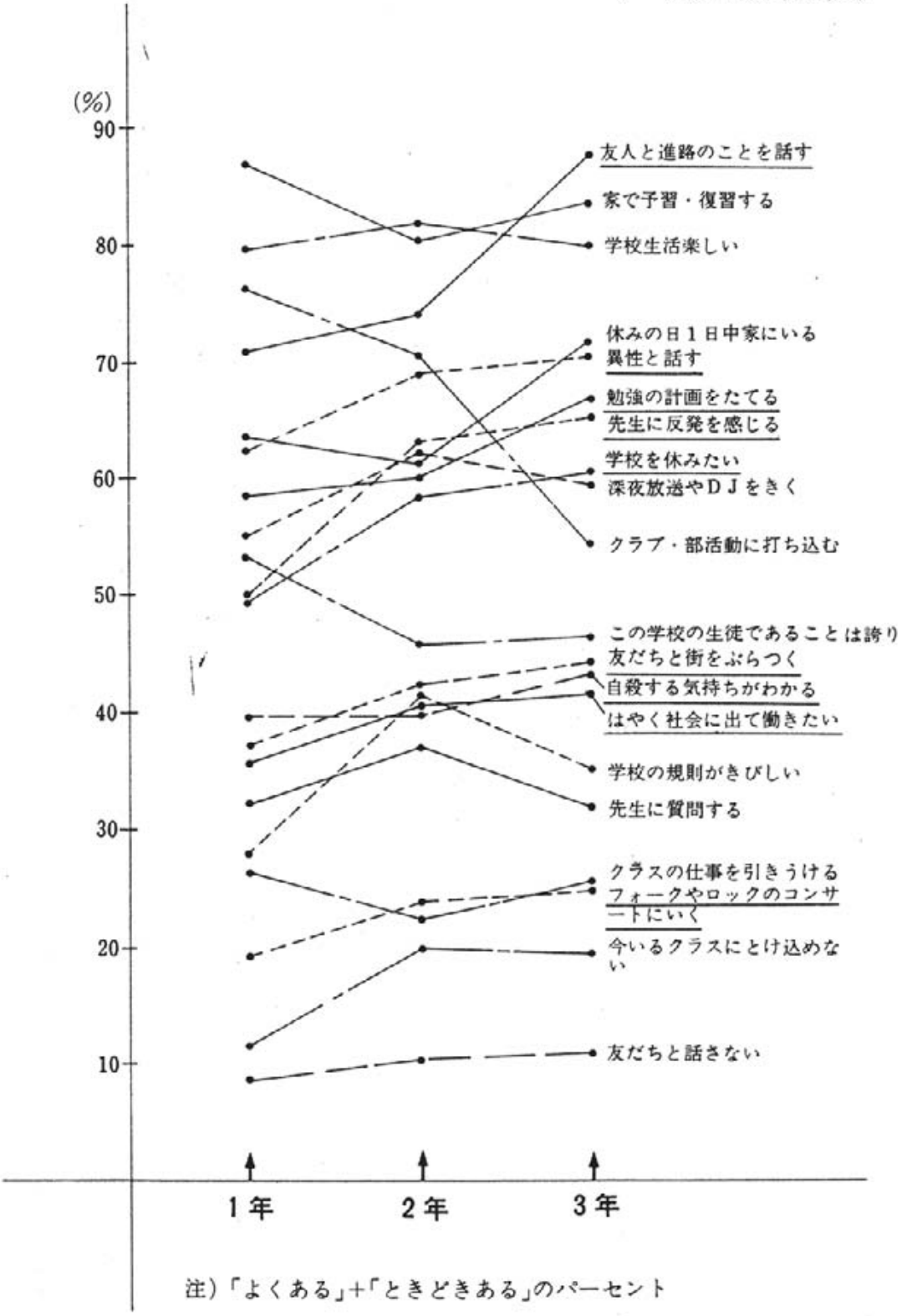
高校生の時期は１・２年で大きく変わる時である。とりわけ１年と２・３年の差は大きい。（図Ⅱ－２）

上級学年ほど高くなる行動や意識は，勉強への関与，ユースカルチャーへのコミット，脱学校への志向と３つある。それぞれ「友人と勉強や進路のことを話す」「学校で異性と話す」「先生に反発を感じる」などがその典型である。

学年の上昇とともに減少するのは「クラブ・部活動に打ち込む」である。２年生で多いのは，「学校生活は楽しい」と「学校の規則はきびしい」「深夜放送やDJをきく」である。逆に２年生が少ないのは「家で予習・復習する」「休みの日１日中家にいる」「クラスの仕事を引きうける」である。つまり，２年生はまだ受験の重圧も感じず，比較的のびのびした生活を送っている。

図II－2　生徒の行動様式×学年差

（――上級学年ほど多いもの）



注）「よくある」+「ときどきある」のパーセント

4）学校差・成績差

次に，学校差と成績差が生徒の行動と意識にどのような影響を与えているかをみてみよう。学校と成績と行動の三重クロスをして生徒の行動様式が，学校差という要因によって規定されるところが大きいのか，成績という普遍的要因によって規定されるところが大きいかを検討してみたい。

データ篇に示されているように，Aグループの学校には中学時代の成績の高いものが入っているが，今の成績の自己評価は低いものが多い。Bグループの学校は中学時代の成績の中位が入っているが，今の学校の自己評価は上位が多い。Cグループの学校は，中学時代も今も成績に自信がない生徒が多く入っている。

中学時代の成績がA校とB校の中間の時，A校に入学して下位に位置するか，B校に入って上位に位置するかの選択を迫られた生徒も多いであろう。どちらの場合が成績の向上があり，高校生活を充実して送れるかは，検討に値するテーマである。一流といわれるA校に入学した方が，校風や生徒の影響を受けてより以上の伸びがあるかもしれないが，逆に，抱かなくてよかった成績による劣等感をもち，自信を失うかもしれない。B校にいけば，成績に対し自信はつくが，仲間に引きづられて高い野心はもたず，のんびり過ごしてしまうかもしれない。

学校差と成績差と意識行動の三重クロスをとってみると，生徒の行動や意識には3つのタイプのあることがわかる。

第1のタイプは，成績差より学校グループ差の大きいもの。たとえば図II－3のように，「深夜放送やDJをきく」は，成績にかかわりなく，Cグループでよくきき，Bグループは中間で，Aグループはきかない。これは，それぞれの学校の雰囲気や仲間集団（peer group）の影響があると思われる。これと同様の回答傾向を示すのは（カッコ内は最大グループ），「この学校の生徒であることは誇り」（A），「先生に反発を感じない」（A），「はやく社会に出て働きたくない」（A），「学校の規則がきびしい」（B），「学校を休みたい」（C）である。

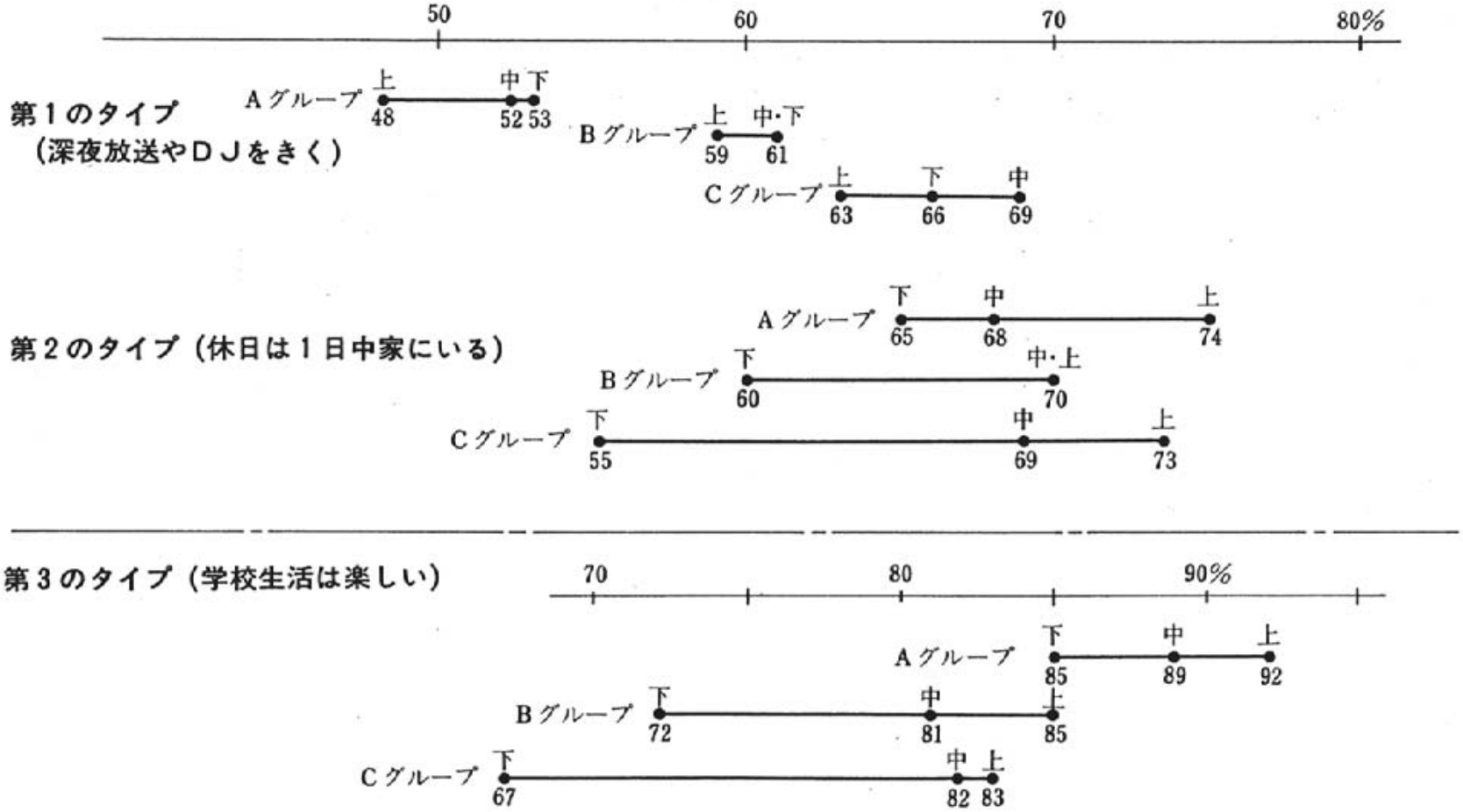
第2のタイプは，学校グループ差より成績差の大きいもの。それは「休みの日は1日中家にいる」と「先生にわからないところを質問する」である。この2つは学校差がほとんどなく，成績上位者ほど多く，下位者ほど少ないという傾向を示す。

第3のタイプは，学校差と成績差の両方が生徒の行動や意識を規定し，どちらが有力とはいえないものである。「学校生活は楽しいと感じる」など，残りの12の質問項目（質問A，C，D，E，F，G，H，I，K，M，N，P）がこれに入る。

以上のように，生徒の意識と行動は，学校差と成績差によって同時に規定されることが多いことがわかる。これはそれぞれの学校グループが進学率の差違に規定された独自の校風や学校文化をもっているため（学校差）と，またすべての学

図II－3　行動様式×学校グループ・成績

注)「よくある」＋「ときどきある」のパーセント



校に共通している面（たとえば成績重視）があるからである。

全体に，進学校で成績のよい生徒ほど学校適応に関する回答が多く，非進学校，成績の低い生徒ほど脱学校の意識をもつようになる。

表II－1　進路希望×学校グループ・成績

学校グループ	成績	高校卒業後の進路希望						
		就職・家業	各種・専修	短大	私立大	国公立大	まだ決めていない	計
A	上	1.1	0.0	0.0	11.0	①80.7	7.2	100.0
	中	0.0	0.5	2.1	15.3	②74.6	7.5	100.0
	下	0.8	1.4	3.7	17.8	④63.4	12.9	100.0
B	上	∧2.0	2.9	5.7	9.1	③72.9	7.4	100.0
	中	5.9	7.6	14.1	10.6	⑥48.8	13.1	100.0
	下	6.1	9.5	13.7	15.6	⑦34.9	20.2	100.0
C	上	∧9.9	5.4	10.4	11.4	⑤53.5	9.4	100.0
	中	13.5	12.1	16.9	17.5	⑧27.3	12.7	100.0
	下	16.0	17.3	13.1	19.8	⑨12.9	20.9	100.0

国公立大志望順位

高校卒業後の進路希望を学校グループと成績とのクロスでみると，表II－1のように，学校と成績の両方によって進路希望は規定されていることがわかる。就職希望率は成績にかかわりなく学校差が大きい（図II－3の第1タイプ)。国公立進学希望率は，学校差はあるものの，Bの上位はAの下位を上回り，Cの上位はBの中・下位を上回るという成績により学校差を越える傾向も出てくる（図II－3の第3タイプ)。

2　高校生の生活の比重

高校生の日常の主な生活領域や関心事について，生活の中でどの程度の比重を占めているかを尋ねた（Q6)。図II－4は，「生活のすべて」と「かなりの部分」と答えた割合を示す。

全体では,「友だち」(50.4%),「受験や勉強」(45.3%),「クラブ・部活動」(32.4%),「音楽」(30.6%),「テレビ」(20.4%),「異性」(16.3%）の順となっている。世にいわれるほど異性に関心を示しているわけではなく，また，テレビ・音楽に没頭ているわけでもない。同性の友人関係と勉強中心の生活を送る堅実な高校生像が浮かびあがってきた。

性別でみると(図A)，友人関係を女子がとりわけ重視し，男子はテレビ視聴の占める率が高いことがわかる。

学年別でみると(図B)，1年生はすべての生活領域にわたって平均した比重のかけ方をしている。2年生は友だち関係と部活動中心の生活を送っている。3年になると，はっきり受験や勉強中心の生活を送ることがわかる。

このように現代の高校生の生活の比重のかけ方は，学年差のきわめて大きいことが特徴である。

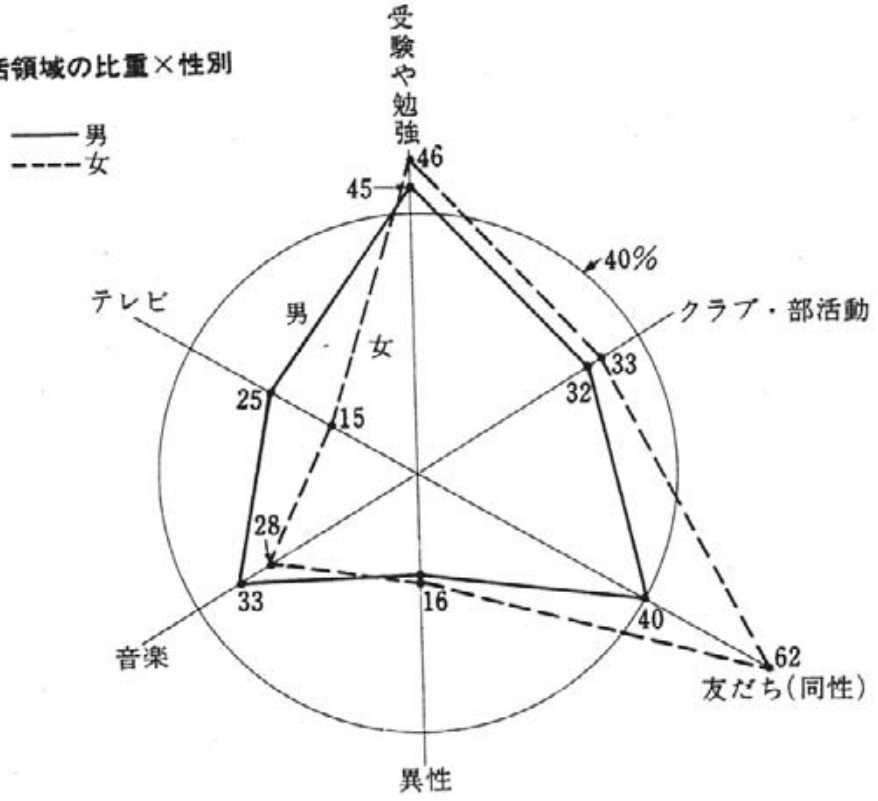
学校グループ別(図C)でみると，学校差の大きいのは勉強や受験に関することである。進学校ほど勉強や受験が生活に占める率は高く，それらの学校のアカデミックな学校文化の存在を思わせる。その他の領域では，テレビ視聴が進学校で多少，少なくなるが部活動，友人関係，異性関係に関しては学校差がない。学校のインフォーマルな側面やユースカルチャーへの関与は，どのような学校でも共通しているのである。

成績別（図D）にみると，学校差と同じく「受験や勉強」に関して差が大きく，その他は大きな差がない。

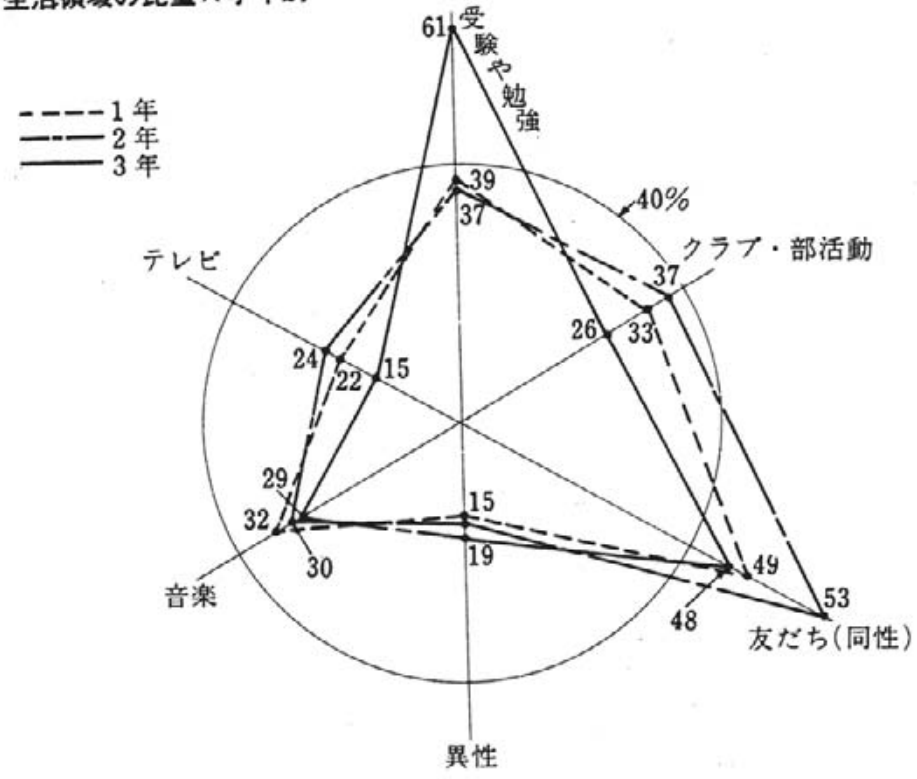
以上のように，現代の高校生の生活の中心は第1に友人関係におかれ，ヨコ関係を通してタテ関係からでは学べない遊び，友情，連帯，自立といった価値を学んでいるのである。3年になると受験の重圧がかかってくるが，受験や進路のことに比重をおくかどうかは，通う学校の雰囲気や成績や進路によるところが大きい。大きな野心をもち将来に備え，現在の生活を楽しむことを先に延ばす欲求充

図II－4　生活領域の比重（生活のすべて＋かなりの部分）

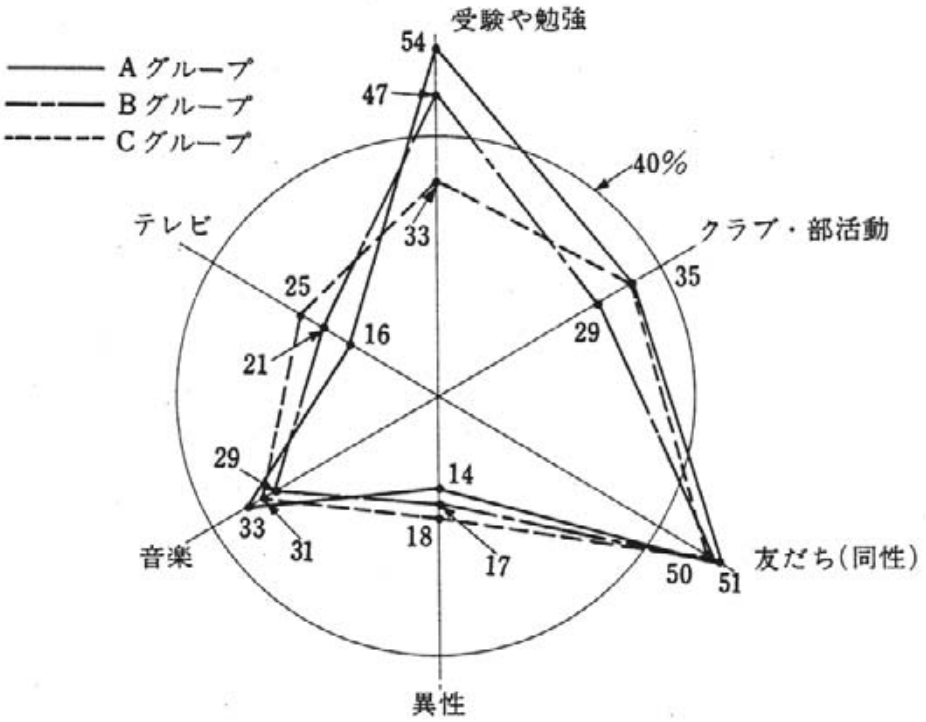
A）生活領域の比重×性別



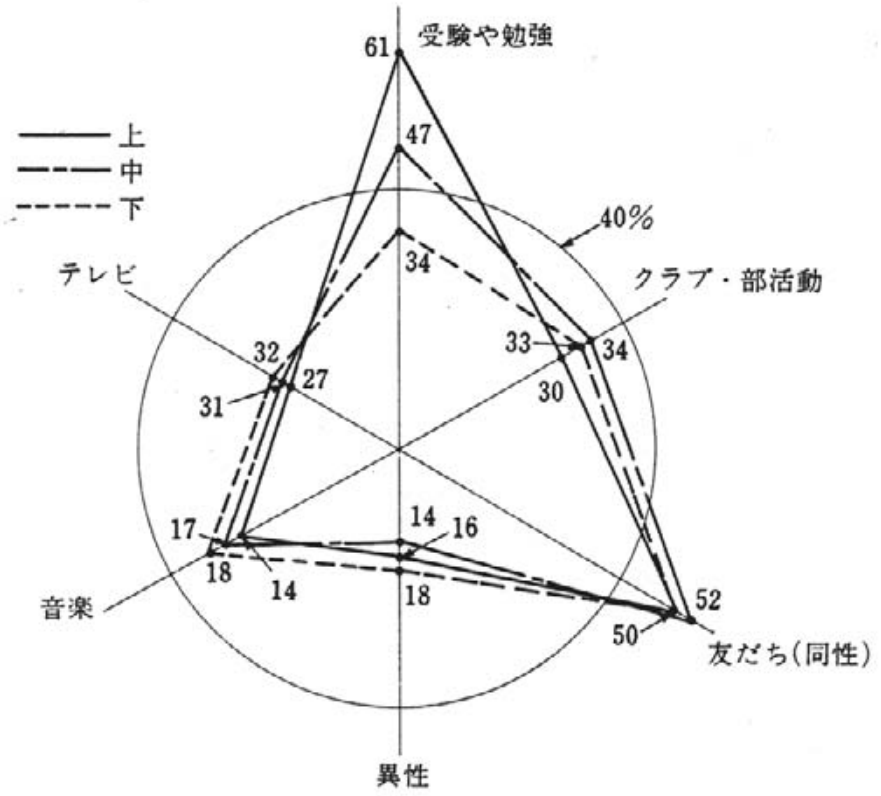
B）生活領域の比重×学年別



C）生活領域の比重×学校グループ別



D）生活領域の比重×成績別



足延期型の生徒と，勉強に対する挫折感を感じ，現在の欲求に身をまかす欲求充足型の生徒という分化が学年とともに進行するのである。

3　現代高校生の一般的傾向

日頃青年に接している印象から，現代の青年の一般的特性として次のような6つのことがあげられると考えた。

1）偏差値人間―情報化社会が進み，コンピューターが各所に導入される中で，青年たちは自分のおかれた位置を数字に換算して知ることができるようになった。その端的なあらわれがインベーダーゲームのブームである。自分の成績も偏差値によって知ることができる。どのような進路選択がふさわしいかも偏差値によって判断することができる。そのような状況の中で生活していると，数字や偏差値に換算しないと安心できないパーソナリティーが育っているのではないか。（ＱＡ）

2）人間関係の希薄化―現代青年の友人志向は強いにしても，その友人関係は表面的でその結びつきは希薄化してもろいのではないか。（ＱＣ）

3）待ちのパーソナリティー――裕福な時代に育った子どもたちは，黙っていても欲しいものがおとなたちから与えられた。その結果，自分たちで行動をおこしていく意欲は少なく，おとなたちがなにか与えてくれるのを待っている。受身的なパーソナリティーが育っているのではないか。（ＱＥ，Ｆ）

4）権威への従順性 ― 青少年たちは，現代社会の権力構造がはてしなく巨大であることを知っている。権力に対しては無駄な抵抗をするより利口に立ち回った方がよいと考えている。（ＱＤ）

5）熱中世代―現代の若者はシラけているといわれるが，決してそのようなことはない。何かのきっかけさえあれば，パーと燃える燃焼力をもっている。（ＱＢ）

6）屈折した心理―現代の若者は，過去の青年の生き方をすべて背負っている。まじめさも，遊びの精神も，反抗心も，無気力さも。したがって，行動や心理は複雑に屈折せざるを得ない。（ＱＧ）

以上のような現代青年の特質と予測したものを，高校生たちは どの程度認めるか，あるいは自覚しているかを問うたのがQ16である。結果は表Ⅱ－２に示したように，「熱中世代」に９割，「屈折した心理」「偏差値人間」に５割，「権威への従順性」「人間関係の希薄化」に３割弱，「待ちのパーソナリティー」に１割強という，賛成・自覚率である。現代の高校生は決して消極的であったり，シラケているのではなく，その心理は屈折していて，感受性に欠けるおとなには理解できないかもしれないが，何かきっかけがあれば，すぐのりやすい熱中世代なのであ

る。高校生自身は少なくともそう思っている。

表II－2　青年期特性に対する評価

(%)

	Q記号	全体	男子	女子
1 偏差値人間	A	50.3	53.1	47.2
2 人間関係の希薄化	C	23.7	23.3	24.2
3 待ちのパーソナリティー	E	15.2	18.2	12.1
	F	10.2	13.2	7.1
4 権威への従順性	D	28.1	25.5	30.8
5 熱中世代	B	88.4	87.7	89.1
6 屈折した心理	G	55.7	53.9	57.5

注)「賛成」＋「やや賛成」のパーセント

III　高校生の価値観―学校生活を中心に―

1　高校生の行動選択の基準

高校生は学校でどのような生活を送っているのだろうか。そしてそれは，どのような意識に根ざしているのだろうか。この調査では，高校生の日常的な学校生活に潜む価値観や基本的態度を明らかにするために「状況設定型」の質問を用意した。ある状況に立たされた場合に生徒たちはどのような行動を選択しているのか。さまざまな状況を設定し，それへの反応のパターンを探ることによって，行動の選択の基準となっている価値観や基本的態度を明らかにすることがここでのねらいである。

このような質問の分析方法としては，数量化Ⅲ類がある。数量化Ⅲ類は，雑多な反応の中からパターンの似たものをみつけ出し，それらを整理する１つの「筋」を探ろうとするものである。このようにしてみつけ出された「筋」を事後的に解釈することによって，高校生の学校の日常生活の背後に潜む価値観や基本的態度をとらえることができる。（「状況設定型」の質問の意義，方法については，吉田昇，門脇厚司，児島和人編著『現代青年の意識と行動』ＮＨＫブックス1978年参照。）

1)　〝まじめさ〟と〝したたかさ〟

ここでは，全部で22ある状況設定型の質問（Ｑ７）の中から，とくに，学校内の生活に関わる質問を13選び，それに数量化Ⅲ類を適用した。調査項目は次の通り。

C　朝食を食べずに登校したため，2時間目が終わったところで，お腹がすいて仕方がありません。その時あなたなら。

1．早弁をする。	2．昼食時間までがまんする

E　仲の良い友だちから次の授業に出られないので，かわりに返事をしてくれと頼まれました。その時あなたなら。

1．引きうける。	2．断わる。

F　英作文の問題を黒板でやるようにと先生から指名されました。ところが予習してありません。その時あなたなら。

1．友だちのノートをかりてそのまま写す。
2．自分の力でやってみる。

G　授業で難しい質問の答えがわかりました。先生が「誰か答えられる者はいないか？」と言っています。その時あなたなら。

1．手を上げて答える。	2．先生に指名されるまで待つ。

H　H先生の授業は受験にも関係ないし，いつも退屈でつまりません。その時あなたなら。

1．おしゃべりをしたり，いねむりをしたり，内職をしたりする。
2．まじめに授業をうける。

I　朝，学校に来たら3時間目の授業で提出する宿題を忘れたことに気がつきました。その時あなたなら。

1．友だちのノートを写してでも，とにかく提出する。	2．提出をあきらめる。

J　定期試験の最中，どうしてもわからない問題があります。ところがふとしたはずみで前の人（クラスで1，2番の人）の答えが見えてしまいました。その時あなたなら。

1．その答えを書いておく。	2．人の答えを写したりはしない。

K　復習をしていたら授業で先生の言っていたことに誤りがあることがわかりました。翌日，その先生の試験があります。その時あなたなら。

1．先生の言ったとおり答えを書いておく。
2．自分で勉強したとおりの答えを書く。

L　期末試験の英語の答案がかえってきました。よく見ると自分のまちがった答えが○になっています。その時あなたなら。

1．先生に申し出る。	2．そのまま黙っている。

M　午後の英語の授業で，眠くてしかたがありません。あなたは，今，あてられたばかりできょうはもうあたりません。その時あなたなら。

1．本にかくれるなどして眠ってしまう。
2．目をこすってでも起きている。

Q　なりたくなかったのですが，クラス代表の委員に選ばれてしまいました。きょうも委員会があります。しかし，大事な大会をひかえ，部活動の練習にも出なくてはなりません。その時あなたなら。

1．クラスの代表委員として委員会に出る。	2．大会が大事なので，部活動に出る。

R　午後，授業のあとで生徒総会（集会）が開かれます。ところが，きょうは予備校(塾)で試験があります。その時あなたなら。

1．生徒総会(集会)に出る。	2．予備校(塾)に行く。

T　期末試験の答案が返ってきました。英語は山が当たって良い成績でした。数学の点数はあまり良くありませんでしたが，むずかしい証明問題ができていました。その時あなたなら。

1．英語の点数がよかったことの方がうれしい。
2．数学のむずかしい問題がとけたことの方がうれしい。

まずはじめに，これら13の質問への反応のパターンを，もっとも明白に仕分けている第Ⅰ軸をみて，その「筋」を探っていくことにしよう。(表Ⅲ－1)

表III—1　I軸・II軸カテゴリーウエイト表

I軸	Q—2	委員会と部活動が重なったら，部活動にでる。	−1.72	H—2	受験に関係のない退屈な授業でもまじめにうける。	+2.06
	M—1	授業中，どうしても眠いと本にかくれて眠ってしまう。	−1.57	F—2	予習していない問題を指名されたら自分の力でやってみる。	+1.44
	J—1	試験中，わからない問題の答えがふと見えたらそれを写しておく。	−1.23	C—2	お腹がすいて仕方がなくても昼食時間までがまんする。	+1.41
	R—2	生徒総会と予備校の試験が重なったら予備校に行く。	−1.09	E—2	仲の良い友だちから代返をたのまれても断わる。	+1.40
	C—1	お腹がすいて仕方がないと早弁する。	−1.05	M—2	授業中，とても眠くても，目をこすってでも起きている。	+1.39
	E—1	仲の良い友だちから代返をたのまれたら引きうける。	−0.98	L—1	試験の答案が採点ミスで誤答に○がついていたら，先生に申し出る。	+1.23
	H—1	受験に関係のない退屈な授業ではおしゃべりをしたりいねむりをしたりする。	−0.98	J—2	試験中，わからない問題の答えがふと見えても，それを写したりしない	+0.96
	I—1	予習していない問題を指名されたら友だちのノートを借りて写す。	−0.78	Q—1	委員会と部活動が重なったら，委員会に出る。	+0.79
II軸	T—1	むずかしい問題ができるより，山が当たって点数が良い方がうれしい。	−2.19	I—2	宿題を忘れたら提出をあきらめる。	+1.17
	K—1	先生の授業に誤りがあっても，試験のときは，先生の言う通り答えを書く。	−2.12	L—1	試験の答案が採点ミスで誤答に○がついていたら，先生に申し出る。	+1.92
	J—1	試験中わからない問題の答えがふと見えたら，それを写しておく。	−1.28	Q—2	委員会と部活動が重なったら，部活動に出る。	+1.53
	L—2	試験の答案が採点ミスで誤答に○がついていても黙っている。	−1.19	T—2	山が当たって点数が良いよりむずかしい問題ができた方がうれしい。	+1.31
	C—2	お腹がすいて仕方なくても昼食時間までがまんする。	−1.16	G—1	授業でむずかしい質問の答えがわかったら手をあげて答える。	+1.30
	I—1	宿題を忘れたら，友だちのノートを写してでもとにかく提出する。	−0.86	J—2	試験中，わからない問題の答えがふと見えても写したりしない。	+1.00
	E—2	仲の良い友だちから代返をたのまれても断わる。	−0.86	C—1	お腹がすいて仕方がないと，早弁する。	+0.87
	Q—1	委員会と部活動が重なったら委員会に出る。	−0.70	F—2	予習していない問題を指名されたら，自分の力でやってみる。	+0.73

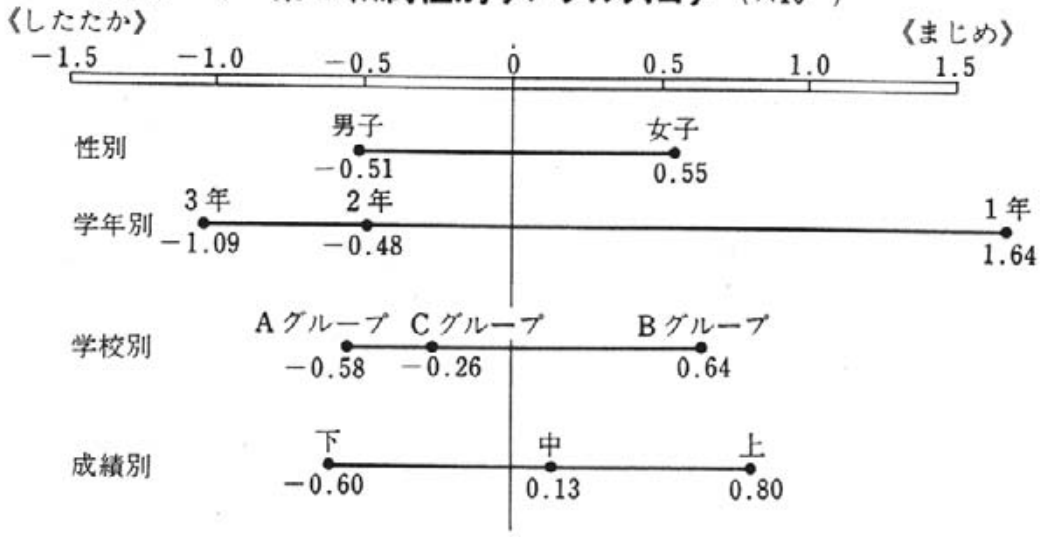
Ⅰ軸のプラス方向は,「退屈な授業でもまじめに受ける」,「自分の力で問題を解く」,「早弁はしない」,「代返を断わる」,「採点ミスは不利でも申し出る」と,学校生活のさまざまな場面でのまじめな態度があらわれている。《まじめさ》と名づける。

それに対しⅠ軸のマイナス方向は,「委員会より部活動に出る」,「授業中眠る」,「人の答案を写す」,「生徒総会より予備校に行く」,「代返や早弁をする」と,比較的ふまじめな態度が中心になっている。同時に現代の高校生のぬけめなさ,要領のよさもうかがえる。したがって,《したたかさ》を示す軸ということができる。

このようにして,高校生の日常生活に潜む行動選択の1つの筋道として,《まじめさ》と《したたかさ》を仕分ける軸があるということができる。

次に,どのような属性をもつ生徒が学校で《まじめ》な,あるいは《したたかな》態度をとるのかをみておこう。

図Ⅲ—1　第Ⅰ軸属性別サンプルスコア（$\times 10^{-1}$）



図Ⅲ−1に,性,学年,学校グループ,成績別のサンプルスコアを示した。これから次のようなことがわかる。

(1) 男子は《したたか》女子は《まじめ》。

(2) 学年の進行とともに《まじめ》から《したたか》へ移行する。

(3) 成績の上の者ほど《まじめ》で,成績が下がるにつれて《したたか》になる。

(4) 大学進学率の高いAグループの学校は《したたか》。校則を守らせることに力を入れているBグループの学校は《まじめ》。

2) 《実質重視》と《形式重視》

次にⅠ軸に次いで有力なⅡ軸についてみると，マイナス方向に，「点数がよかった方がうれしい」，「先生の言う通りに答えを書く」，「人の答案を写す」，「採点ミスは自分に有利なら黙っている」，「早弁はしない」というように，物事の実質面よりも形式面を重視する傾向が出てくる。その対極のプラス方向は，「人のノートを写して宿題を出したりしない」，「採点ミスは不利でも先生に申し出る」，「委員会より部活動に出る」，「難しい問題ができた時うれしい」というように，形式面よりも実質面を重視する傾向である。

つまり自分の思ったことやしたいことを優先させる傾向をあらわしていると見ることができる。したがってⅡ軸は《形式重視》と《実質重視》とを仕分ける尺度であるということができる。

Ⅱ軸について，生徒の属性別のサンプルスコアの動きをみると，次のようなことがわかる。（図Ⅲ－２）

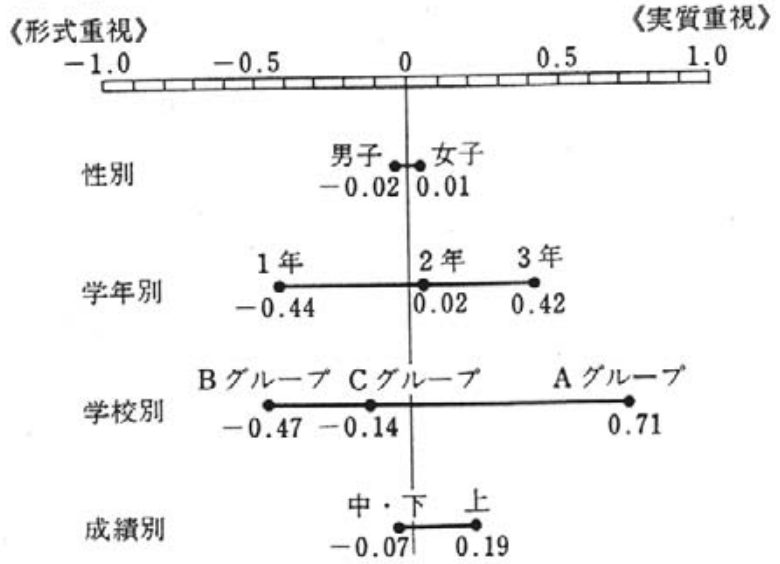
(1) 男子と女子では差がない。

(2) 学年の上昇につれ，《形式重視》から《実質重視》へと移行する。

(3) 成績別にみると，大きな差ではないが，上位者が多少《実質重視》となっている

(4) 進学率の高いＡグループの学校は《実質重視》。校則のきびしいＢグループの学校は《形式重視》となっている。

図Ⅲ—２　第Ⅱ軸属性別サンプルスコア



図III－3　生徒の価値タイプ

3)　4つの象限にみる価値タイプ

さて，こうして得られた2つの軸を組合わせることによって，高校生の学校生活に関わる価値基準を構造化してとらえることができる（図III－3）。つまり，I

軸によって仕分けられた《まじめさ》,《したたかさ》についても，それぞれ，II軸のプラスとマイナスの方向にさらに2つのまとまりに分けてみることができるのである。同じ《まじめさ》であっても,《実質重視》の方向にあるもの（第I象限）は，F(2)，I(2)，J(2)，K(2)の反応に代表されるように，何か自分に信念をもった，きっぱりとした《まじめさ》である。それに対し，まじめであっても《形式重視》の方向に向かう場合(第IV象限）には，形にとらわれた融通のきかない《きまじめさ》が感じられる。このように，学校生活におけるまじめな対応の中にも自分の信念に従う結果としての《まじめさ》と，自分の外にある形式や原則に従う結果としての《まじめさ》との2つの異なる意識の構造があるのである。《したたかさ》についても同じである。《実質重視》に向かう場合（第II象限）は，自分のやりたいことや自分にとって重要なことを優先させるがゆえの《したたかさ》である。それに対し,《形式重視》に向かう《したたかさ》(第III象限）は，試験の点数など自分の外側にある基準に照らして損得を計算した結果の打算的な《したたかさ》である。

このようにみると，第II軸の《実質重視》と《形式重視》に大きな意味の違いがあることがわかる。学校生活の中である行動をとる場合には，その行動選択の基準が，自分の内なるものか，あるいは外にあるものかで，その行動にこめられる意味に違いのあることがわかる。つまり，学校生活の似たような場面での似たような行動でも，その背後の意識構造に違いのある場合，たとえば，動機が自分の欲求に根ざした行動と打算的な判断に根ざした行動との場合――それはまったく意味の違う行動なのである。

2　高校生の価値観の構造

1)　4つの価値タイプ

I軸（まじめ・したたかさ）とII軸（実質重視・形式重視）を交差してつくられた4つの生徒のタイプ（それは学校生活にひそむ価値観や基本的態度を仕分けていると考えられる）に，軸の意味とカテゴリーの分布の特徴を考えて名称を与えよう。

第I象限―「信念型」――自分に信念をもち，形式や損得にとらわれない《まじめ》派

第II象限―「欲求充足型」――自分のやりたいこと，したいことを優先する《したたか》派

第III象限―「打算型」――試験の点や先生からの評価を損得勘定して行動する《したたか》派

第IV象限―「きまじめ型」――原則や形式にとらわれ，融通のきかないところ

もある《まじめ》派

こうして作られた4つの高校生のタイプはそれぞれどのような特徴をもつのか。基本的属性，行動の特性，意識特性の3つの面からそれぞれのタイプの特徴を明らかにしていきたい。こうした考察を通して，4つのタイプに分けられた高校生の価値観の成り立ちを探っていくことができる。

2) 各タイプの基本的属性

先にあげた4つの高校生のタイプは，どのような属性の生徒に多いのであろうか。図Ⅲ—4に生徒の属性別に各タイプの割合を示した。

性別でみると，「信念型」「きまじめ型」という《まじめ派》の2つのタイプは女子に多く，「欲求充足型」「打算型」という《したたか派》の2つのタイプは男子に多い。

学年別にみると，学年の上昇とともに《まじめ派》の2タイプが減少し，かわ

図Ⅲ—4　各タイプの属性別構成

《まじめ派》　《したたか派》　(%)

		信念型	きまじめ型	欲求充足型	打算型
全体		24.9	24.6	24.7	24.7
性別	男子	[illegible]	21.7	[illegible]	28.4
	女子	[illegible]	27.7	[illegible]	20.8
学年	1年	30.7	-	35.7	17.9
	2年	23.3	21.2	[illegible]	27.8
	3年	21.0	17.2	[illegible]	28.0
成績	上位	[illegible]	25.1	[illegible]	21.0
	中位	24.2	26.7	[illegible]	24.3
	下位	24.2	22.5	[illegible]	27.3
学校グループ	A	[illegible]	17.3	[illegible]	21.7
	B	25.0	31.0	[illegible]	24.5
	C	25.0	23.4	[illegible]	28.6

って《したたか派》の2タイプが増加する。とりわけ学年の上昇とともに「きまじめ型」が半減し,「欲求充足型」が倍増する。

成績別にみると，成績上位者に多いのは「信念型」で，成績の下降とともに，「欲求充足型」と「打算型」という《したたか派》がふえる。

学校グループ別にみると,進学校であるAグループの学校の生徒が《まじめ派》とは限らないことがわかる。Aグループの学校では《したたか派》の「欲求充足型」が多く，Bグループの学校に「きまじめ型」が多くなっている。これはBグループの学校の規則がきびしいことも関係があるのかもしれない。

以上をまとめてみると，各タイプは次のような属性の生徒に多くなっている。

「信念型」――女子，1年生，成績上位

「きまじめ型」――女子，1年生，Bグループの学校

「欲求充足型」――男子，3年生，成績下位，Aグループの学校

「打算型」――男子，2～3年，成績下位，Cグループの学校

表III―2　各タイプの行動特性

(%)

Q5	生徒のタイプ / 行動特性	《まじめ派》		《したたか派》	
		信念型	きまじめ型	欲求充足型	打算型
A	家で予習・復習をよくやる	43.1	38.7	△26.8	27.0
B	先生にわからないところを質問する	40.5	29.2	27.3	△23.9
D	夏休み前など勉強の計画をたてる	68.7	65.7	58.0	△57.0
G	クラスの仕事を進んで引きうける	32.4	25.8	21.3	△19.6
F	クラブ・部活動に打ちこむ	71.1	67.0	67.2	△63.4
E	学校で異性と話す	66.7	△61.3	73.7	69.2
I	学校帰りに友だちと街をぶらつく	36.9	△31.7	50.1	47.8
J	ラジオの深夜放送やDJをきく	△53.1	54.4	62.8	66.4
K	フォークやロックのコンサートに行く	20.9	△13.3	28.7	28.4
O	休みの日は一日中家にいる	67.9	76.0	60.5	60.5

注）質問Aを除き「よくある」と「ときどきある」とをあわせた%
質問Aのみ「よくある」の%，―は最大，△は最少を表わす

3) 各タイプの行動特性

次に4つのタイプの行動特性についてQ5とのクロス集計をみてみよう。(表III—2)《まじめ派》の2タイプは《したたか派》に比べ勉強面には熱心である。それに対し,《したたか派》の2タイプは,深夜放送やコンサートなどユースカルチャー面に強い関心を示す。《したたか派》は成績下位者に多く,勉強面での不満をはらすために,このような活動に強い関心を示すのだと考えることができる。

「信念型」と「きまじめ型」との違いは,前者に「先生にわからないことを質問する」が多く,後者に「休みの日は1日中家にいる」という回答が多いことに象徴される。つまり,「きまじめ型」はおとなしく,消極的であるのに対し,「信念型」は勉強面だけではなく,クラスの仕事やクラブ・部活動にも精力を注いでいるように,多面的で積極的な面をもつ。また,「欲求充足型」と「打算型」とは,大きな差異はみられないが,「欲求充足型」の方が,わずかながら娯楽的な活動への志向が強いとみることができる。

4) 各タイプの意識特性

それでは各タイプは学校生活についてどのような意識をもっているのだろうか。Q5の学校生活に関する質問とのクロスでみてみよう。(表III—3)《まじめ派》の2タイプは学校生活を楽しいと思い,この学校の生徒であることにも誇りを感じている。それに対し《したたか派》の2タイプは,校則をきびしすぎると思ったり,先生に反発を感じるなど,学校に対し不満や反感をもっている。とくに「打算型」は学校に対する不満や反発が強い。また,「きまじめ型」は校則のきびしいBグループの学校に多いにもかかわらず,校則や先生に従順であることも目をひく。このようにみると学校生活の楽しさや誇りといったものが,学校へのまじめな対応を支えているのに対し,それらを感じられずに学校に不満や反発を感じることが,したたかな対応を生むのだと考えることができる。

表III—3 各タイプの意識特性

(%)

Q5	タイプ / 学校生活	《まじめ派》		《したたか派》	
		信念型	きまじめ型	欲求充足型	打算型
H	学校生活は楽しいと感じる	85.8	82.7	78.1	△77.3
Q	この学校の規則はきびしすぎると思う	△28.7	31.8	34.4	<46.8
R	先生に反発を感じる	52.1	△47.7	67.9	70.4
T	この学校の生徒であることは誇りである	53.1	52.5	△43.6	44.6

注) いずれも「よくある」と「ときどきある」とをあわせた%。——は最大,△は最小

5) まとめ

さて，これまでの考察をふまえて，各タイプの意識や行動の特性をまとめておこう。

① 信念型

信念型は，成績上位者に多かった。そして勉強に熱心なばかりか，クラブ・部活動やクラスの仕事にも力を入れている。それゆえ，学校生活も楽しく，学校にも誇りを感じていられる。このような，学校での充実感が自信を生み，その自信を背景に，学校でのまじめな態度が支えられている。学校での成功が《実質重視》という信念をもつ《まじめさ》を形作っているのである。

② きまじめ型

信念型と比べ，同じ《まじめ派》ではあっても，きまじめ型は，成績上位ということもなく，学校生活の充実感もそれほど大きくはない。先生の成績評価に敏感な者や規則のきびしいBグループ校に多いことを考えると，きまじめ型は，外からはめられたわくにそのまま順応しているタイプであるとみることができる。つまり，学校に不満や反発を感じないほど，学校に順応しており，順応することが当然視されるがゆえの《まじめさ》なのである。このような傾向は，数字や先生の権威を受け入れる態度にもあらわれる。こうして，既存の秩序を受け入れることを通して，安心感を得ているのであり，それが，実質よりも，形式や原則にこだわる《形式重視》に基づく《まじめさ》を形作っているのである。

注）「先生ににらまれると成績を悪くつけられるかもしれないと心配」と思っているものの割合は信念型22.3%，きまじめ型31.9%，欲求充足型24.6%，打算型33.7%となる。

③ 欲求充足型

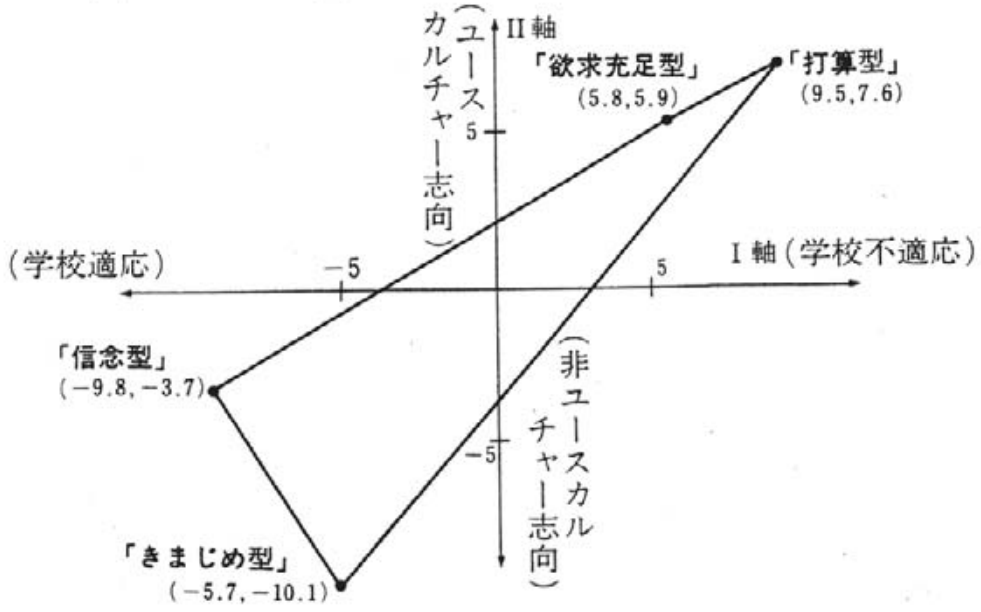
欲求充足型は，成績下位者に多い。そこで勉強面では味わえない充実感を音楽や深夜放送などのユースカルチャーに求める傾向が生まれる。学校のフォーマルな場面での不満を，自分のしたいこと，自分にとって重要なことを優先させることによって解消しているのである。規則のゆるやかなAグループ校に多いのも，このような学校では，欲求充足型を許容するだけの余裕があるからだろう。先生の成績評価に臆することもなく自分のやりたいことを優先する欲求充足型の意識の構造は，このように，学校のゆるやかさの中でこそ可能なのである。こうして，外なる形式や原則にこだわらずに，自分の欲求を優先する《したたかさ》が形作られるのである。また，学年の上昇とともに，欲求充足型が増えるのは，形式のみにこだわって《まじめさ》を維持していた「きまじめ型」の1年生が，学年の進行とともに，学校への反発や不満を感じるようになり，それにつれて，不満を要領よく解消する術を身につけることによって，欲求充足型へと移行するためであると考えることができる。そのような意味で，欲求充足型にみられる《したたかさ》は，充実感を失った学校生活に適応するための1つの手段であるとみることがで

きる。

④ 打算型

打算型も，欲求充足型と同じく成績下位者に多い。勉強面での充実感をあまり味わえないこと，学校に対して不満や反発を感じていることも共通している。違いといえば，打算型は，先生の成績評価に敏感なことである。つまり，打算型は学校に不満や反発を感じているのにかかわらず，学校の権威に臆するために，欲求充足型のように，自分のしたいことを優先させることができない。学校の与えるものを無視できないがゆえに，それをぬけめなくこなそうとする《したたかさ》が生まれるのである。打算型が，規則のゆるやかなAグループに少なく，規則のきびしいB・Cグループに多いのも，学校のしめつけが，生徒の不満解消の道を閉ざしているからである。このように，学校のしめつけが強く，その権威を生徒が承認している場合に，学校への不満や反発は，与えられた形式や原則にこだわる《形式重視》の《したたかさ》の形で解消されることになる。

本章では，高校生の学校生活の日常的場面での反応をもとに高校生の価値観の構造をみてきた。このようにみると，日常的な場面の中にも，高校生のいろいろな思わくがあることがわかった。さまざまな状況におけるさまざまな行為の中にも，もつれながらも一本の意味の筋がとおっているのである。

（生徒の行動様式〔Q5〕から見出される生徒のタイプとの関係は図III—5のごとくである。）

図III—5　生徒のタイプ（Q5×Q7）